札幌市文化財調査報告書

Ⅲ

1974

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 Ⅲ

T 77 遺　跡

1974・3

札幌市教育委員会

序　　言

札幌市豊平区西岡66番地の1を中心とする本遺跡は，考古学研究者の間にもその存在をまったく知られていなかったものである。昭和46年12月，私は，偶然にも札幌大学外国語学部英文科学生の碇石純夫君から，本遺跡をも含めた月寒・西岡地区の諸遺跡について種々御教示を得る機会に恵まれた。本遺跡に関しても，すでに小学校・中学校時代を通じてその存在を確認していたとのことである。同君の案内で本遺跡を訪れた私は，本遺跡がすでに宅地造成により部分的に破壊を受けていること，しかし，かなり広範囲の部分が林藪地としてなお残存していることを崖面における遺物包含層のチェックによって確認したのであった。そこで，札幌大学考古学研究会の学生諸君に，雪融け時の表面採集の良好な頃を見計って正確な遺跡範囲の確認を行なうよう依頼したのである。その結果，遺跡範囲は北側一帯の牧草畑に広く及ぶことが判明した。

ところで，近年この西岡の一帯にも宅地造成の波が押し寄せ，すでに46年末現在で本遺跡も未確認，未登録のまま，一部が破壊の憂き目に会っていたのであった。そこで，本遺跡の他の大部分も宅地造成の計画にあるいはすでに組み込まれているかもしれないとの危惧が生じたので，遺跡発見の通報を札幌市教育委員会に行なう一方，付近にたまたま下宿していた札幌大学考古学研究会の谷藤謙二君にその点に留意してパトロールを依頼したのであった。

谷藤君達より宅地造成計画に伴なうらしい測量，杭打ちが牧草地において開始されたとの知らせを受けたのは，それより一カ月も経たない47年5月に入ってのことである。直ちに，札幌市教育委員会にその旨通知し，工事主体者が日本信販であることも判明した。そして，現地に札幌市文化財専門委員の北海道大学北方文化研究施設教授大場利夫博士，私，札幌市教育委員会及び日本信販からそれぞれ担当の係官が集り，話合いの機会がもたれたわけである。日本信販側からは，そこが埋蔵文化財包蔵地であることをまったく知らなかった旨の主張が強くなされた。結局，その場は遺跡の存在及びその範囲の確認にとどまり，後の措置を漸次話合い，検討することとなった。そして，交渉は市教委と日本信販との間に委ねられた。

8月中旬，青森県での発掘調査を終えて帰札した私は，本遺跡にブルドーザーが導入されているのを見て驚き，関係諸方面に問い合せを行なった。その結果，それが工事施工者の一方的意志によるものでなく，市教委側の立合いのもとに遺物包含層の状

況，ローム面における遺構の存在の有無を確認しながらのそれであることも判明した。

ともかく，こうした宅地造成に伴なう工事に際しては，遺跡部分を公園用地として保存することも一策として考えられるのであり，そうした観点から保存を第一に進めるべきこと，工事計画変更を施工者側に要請すべきことを大場利夫博士と協議したのであった。そして，日本考古学協会埋蔵文化財特別委員会委員長の江上波夫氏が日本信販社長山田光成氏と昵懇でもあるため，大場博士より江上氏に連絡をとってもらい，東京においても本社段階での折衝をお願いした。

一方，市教委は，日本信販側の要請もあり，遺跡の性格，状況把握のため，11月19日より1週間の試掘を実施した。時をほぼ同じくして江上氏は日本信販の常務取締役薗部芳郎氏とともに11月28日にわざわざ来道された。そして，現地を視察の結果，ブルドーザーの入った現状とも考え合せ，市教委側による試掘結果に基づく結論を尊重するようにとの指示を下された由である。

こうした経緯を踏まえて，昭和48年4月，再度話合いの機会がもたれた。そして，種々の状況に基づくところ緊急調査止むなしとの結論に達せざるを得ず，妥協せざるを得なかった。本調査は4月29日から5月16日まで行なわれた。

振返ってみて，まず第一に反省すべきはブルドーザ導入以前の段階において，我々の側から積極的に計画変更の強い要請を行なわなかったことである。悔いは，まずこの点に尽きる。今後の大きな教訓となすべきであろう。

石附喜三男

例　言

1　本書は，昭和47年11月19日から11月26日にかけて，昭和48年4月29日から5月16日にかけて実施した豊平区西岡に所在する株式会社日本信販による宅地造成現場にて発見された遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は，札幌大学助教授石附喜三男が担当し，札幌市教育委員会嘱託上野秀一，加藤邦雄，羽賀憲二の3名が現場の仕事を遂行した。

3　本書の執筆は，羽賀憲二が担当した。従って全ての文責は，羽賀憲二にある。

4　発掘調査には，下記の人々が従事した。

内山真澄，大原勢司，笠井衛二，斉藤城徳，長谷川克浩。

北海道大学学生，北海学園大学学生

5　出土遺物整理，挿図浄書には，小尾栄子，佐々木裕美子，森本雅子，吉島ひならの協力があった。

6　株式会社日本信販，株式会社佐藤工業，及び工事関係者の方々には発掘調査に際し，種々の配慮を受けた。記して感謝の意を表したい。

7　石器の石質鑑定には，北海道大学理学部大学院君波和雄氏，北海道開拓記念館研究職員赤松守雄氏の石器表面の肉眼による鑑定をお願いした。

凡　例

(1)　挿図は，完形土器実測図縮尺４分の１，土器拓影縮尺３分の１，土器底部実測図縮尺３分の１，石器実測図縮尺２分の１，第18図のみ縮尺４分の１。

(2)　写真図版は，完形土器縮尺２分の１，土器縮尺３分の１，石器縮尺２分の１，図版10Ｂのみ縮尺３分の１。

(3)　石器実測図輪郭に沿った（－）線は，ニッチに整形ないし使用による細かい図示できない剥離が集中してある事を示めしている。

(4)　石器説明中ａ面とは，背面ないし実測図中の左側正面図を指し，ｂ面とは，腹面ないし右側正面図をいう。

(5)　第19図剥片実測図中に記した矢印は，剥離された方向を現わし，（δ）印は剥離面間の新旧関係を表わす。

目　　次

序　言

第1章　遺跡の位置と環境 …… 1

第2章　発掘区域の設定と層序 …… 6

第1節　発掘区域の設定…… 6

第2節　層　序…… 6

第3章　出土遺物…… 8

第1節　土　器…… 8

完形土器・8　　第Ⅰ群土器・9

第Ⅱ群土器・10　　第Ⅲ群土器・16

縄文時代中期土器底部・17

第2節　石　器……25

Ⅰ石鏃・25　　Ⅱ小型有柄尖頭器・25

Ⅲ石槍・27　　Ⅳ尖頭器破片・27

Ⅴ両面加工ナイフ状石器・29

Ⅵ両面加工石器破片・29

Ⅶ掻器・31　　Ⅷ削器・31

Ⅸ石錐・33　　Ⅹ石核・33

Ⅺ石斧・35　　Ⅻ石錘・37

XIII砥石・37　　XIVたたき石・37

XVくぼみ石・37　　XVI台石・39

XVII擦り石・39　　XVIII石皿・39

剥片類・40

結　語

挿　図　目　次

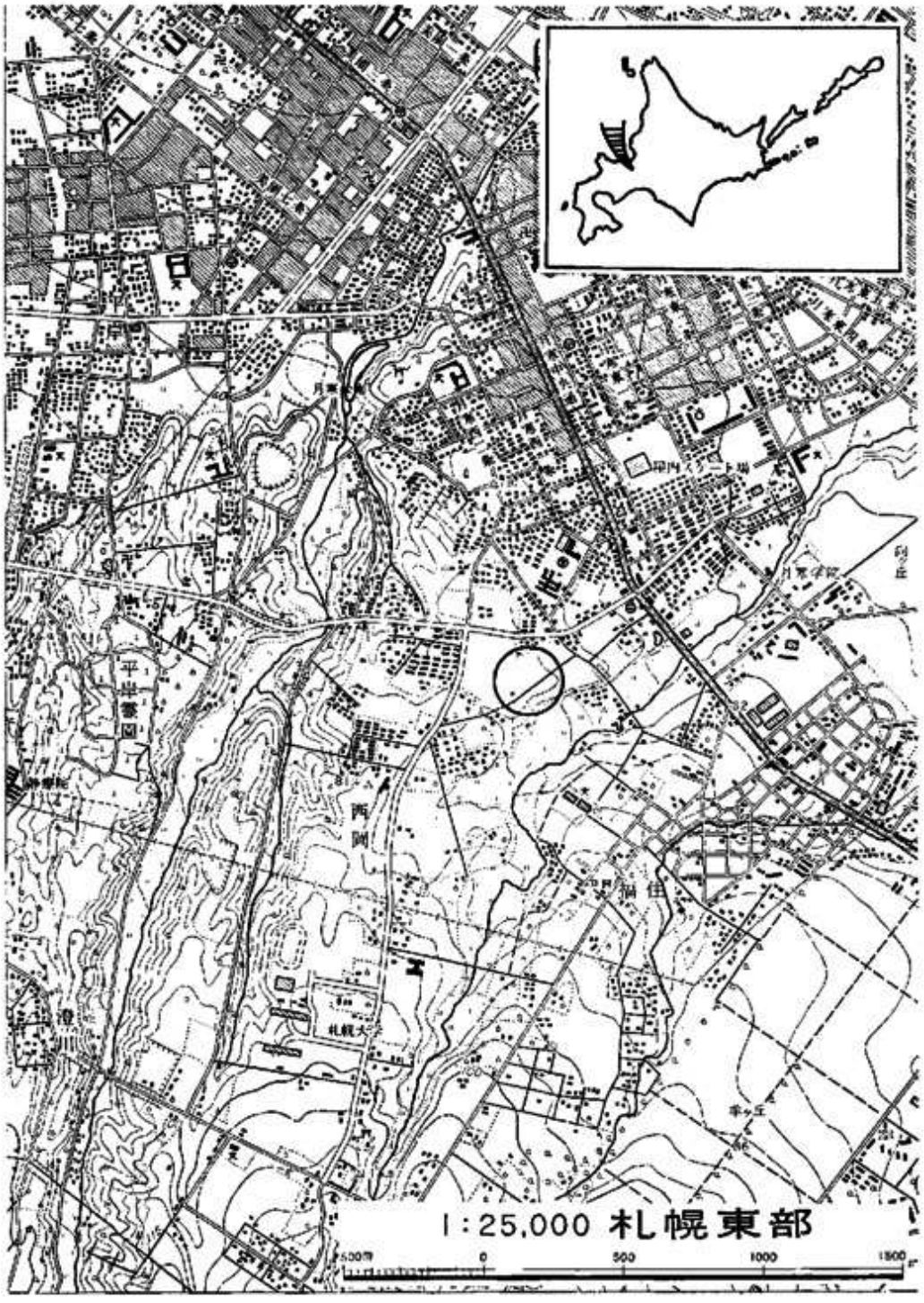
巻首図版
第１図　遺跡地形図…… 3
第２図　発掘区配置図…… 5
第３図　地層堆積図…… 7
第４図　完形土器実測図…… 8
第５図　第Ⅰ群土器拓影……10
第６図　第Ⅱ群土器拓影（A類）……13
第７図　第Ⅱ群土器拓影（B類）……14
第８図　第Ⅱ群土器拓影（B類）……15
第９図　第Ⅱ群土器（C類），第Ⅲ群土器拓影 ……16
第10図　縄文時代中期土器底部実測図……17
第11図　石器実測図（石鏃，小型有柄尖頭器，石槍，尖頭器破損品）……26
第12図　石器実測図（尖頭器破損品，両面加工のナイフ状石器）……28
第13図　石器実測図（掻器，石錐，削器）……30
第14図　石器実測図（石核，削器）……32
第15図　石器実測図（石斧）……34
第16図　石器実測図（石斧，石錘，たたき石，擦り石）…36
第17図　石器実測図（砥石）……38
第18図　石器実測図（たたき石，くぼみ石，台石，石皿，擦り石）……39
第19図　縦長剥片実測図……40
第20図　剥離面よりみた剥片の位置概要図……41
第21図　石器組成比較グラフ……43

付表　石器計測値一覧表……50

図 版 目 次

1 A	遺跡遠景（東より）
B	遺跡遠景（南より）
2 A	発掘風景（昭和47年11月）
B	グリッド配置（南より）
3 A	発掘区遺物出土状態（1）
B	発掘区遺物出土状態（2）
4	完形土器
5 A	Ⅰ-10区北壁セクション
B	土器（1）
6 A. B	土器（2）（3）
7 A. B	土器（4）（5）
8 A. B	石器（1）（2）
9 A. B	石器（3）（4）
10A. B	石器（5）（6）

巻首図版



本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭49道複　第53号

第1章　遺跡の位置と環境

豊平区西岡に存在する，T77号遺跡は5万分の1札幌図幅において北より32.6cm，東より15.5cm，2万5千分の1札幌東部図幅において北より27.8cm，東より33.1cmの地点にある。

札幌-苫小牧低地帯の北西部に位置する札幌市の市街中心部より南東方，平岸より月寒にかけての丘陵地帯で札幌岳付近に端を発する月寒川に関連する段丘上である。

地番は，札幌市豊平区西岡66番地の1である。

遺跡の存在する丘陵地帯は，恵庭，樽前等の火山の爆発に伴って堆積した火山灰層が基盤をなし，月寒川，厚別川，三里川等が狭長な谷をきざんでいる。この丘陵地帯の南方は，次第に高まって山岳地形となり，支笏湖岸にまで連っている。

本遺跡の南側には，月寒川が北東方向へ流れ，遺跡は，月寒川北岸の河岸段丘上に位置する。この段丘上の標高は70m～72mである。月寒川と遺跡の位置する段丘上との比高は，約20mである。

月寒川は，現在では汚れがめだつ小河川であるが，数年前まではその流域に水田が耕作され，本遺跡付近より約4km上流には，水源池が設けられ月寒方面の上水道水源としても利用されていた。

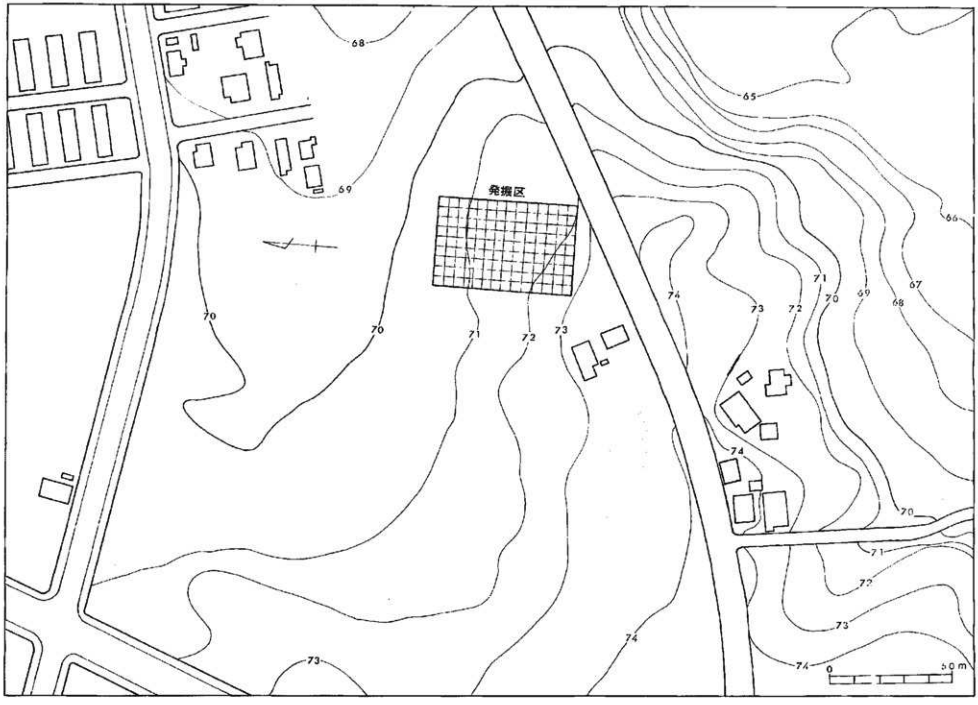
月寒川に関連する段丘上には先年発掘調査がなされた「白石神社遺跡」（札幌市教委1973）をはじめとして，現在までに確認されただけで30数ケ所の遺跡の存在が数えられる。

時期も，縄文時代早期より晩期にかけて，続縄文時代，擦文時代にわたる遺物がみられる。月寒川は，人々が生活を営む上において長期間にわたり重要な役割をになって来た事がうかがえよう。

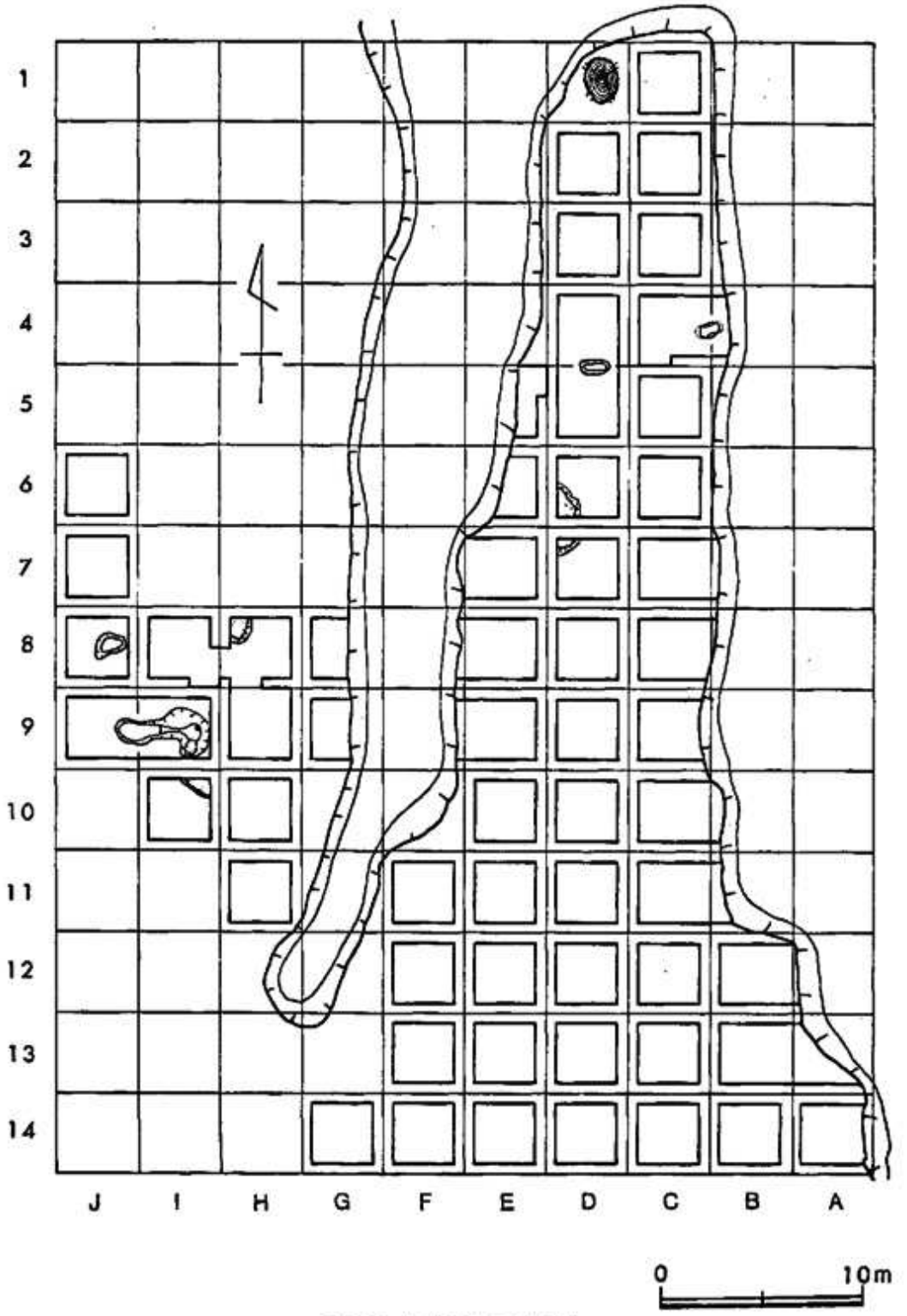
本遺跡の場合，発見，確認が遅れた事により発掘区域約1,000平方mを残したのみで他の部分はすでに宅地造成工事により剝土，整地がなされてしまった。

そのため遺跡の規模，範囲がどの程度あるか知るすべもない。しかし，剝土，整地がすでに終了した部分にも広範囲にわたって土器破片，石器，黒曜石剝片が散乱しており，これより推定しても，本遺跡は非常に大規模であったと思われる。

今回の，調査対象とはならなかったが発掘区と接して道路をはさんだ南側に本遺跡と続く舌状台地がある。この台地上にも土器破片，石器等の遺物がみられ，この舌状台地まで本遺跡の範囲に含まれる事が確認されている。



第1図 遺跡地形図



第2図 発掘区配置図

第2章　発掘区域の設定と層序

第1節　発掘区域の設定

今回の発掘調査は，株式会社日本信販による豊平区西岡の宅地造成現場にて発見された遺跡の緊急発掘調査である。

遺跡の発見，確認が遅れた事より遺跡は，その一部分を残したのみですでに剝土・整地がなされ全てを破壊されてしまっていた。

残された部分を調査対象として，4m×4mのグリッドを組み，両側に層序観察用のあぜを残し，遺構確認を主な課題に調査を開始した。

グリッドの長軸方向が南北方向である。

東西へ，A～J区

南北へ，1～14区

発掘総面積は，約1,000㎡である。

第2節　層　　序

本遺跡における層序の状態は，基盤が軟弱な火山灰質砂層（月寒火山灰層と称され，支笏湖の噴火による物と考えられている。）の為，腐植土層が概して発達しておらず，加えて畑地であったため耕作時の鍬先きがすでに火山灰層にまで達している部分さえ認められ，良好な遺物包含層は，残されていなかった。

層序を大まかにとらえると，上層より耕作土・黒色の腐植土・漸移層・火山灰質ローム・火山灰質砂層（いわゆる月寒火山灰層）に至る。

耕作土より火山灰質ローム層上面までが遺物包含層となる。ここまでの深さは，30cm～50cmである。

記録した，層序図を一部記載した。（第3図1）

Ⅰ層；耕作土

Ⅱ層；暗褐色土層（1）吸湿性があり，粘土（黄褐色粘土）粒がしま状に混入している。

Ⅲ層；暗茶褐色土層，吸湿性に富み，粒子が細い。

Ⅳ層；黒色土層（吸湿性に富みⅢ層より若干粒子が細かい）

Ⅴ層；暗褐色土層（2）根を多く含んでおり，粒子が荒く，吸湿性に富んでいる。

Ⅵ層；漸移層（暗黄色粘質土層）

Ⅵ′層；漸移層（まだらに黒く汚れている）

Ⅶ層；暗褐色粘質土層

Ⅷ層；暗黄褐色粘質土層

Ⅸ層；暗赤褐色粘質土層

Ⅹ層；暗黄褐色粘質土のブロック

Ⅹ′層；暗黄褐色粘質土のブロック

遺構に類する物は，認められなかったが，カク乱と思われるピット状掘り込みは，数個確認されている。形は，円形あるいは不定形を呈する。

自然による，層序のカク乱と認められる部分も存在している（第３図２）（図版５Ａ）。理由は，明らかにされなかった。

以下の様な堆積を示す。

Ⅰ層；漸移層，全体に黒っぽく汚染されており粘質に富んでいる。

Ⅱ層；黄褐色粘土層（１）地山である，多くの砂粒を含んでいる。

Ⅲ層；褐色粘土層（１）多量の砂が含まれ，粘性は強くない。

Ⅳ層；褐色粘土層（２）砂は含まれず，粘質に富む。

Ⅴ層；火山灰質砂層と粘土層の互層。

Ⅵ層；褐色粘土層（３）若干の火山灰質砂を含み，粘性がある。

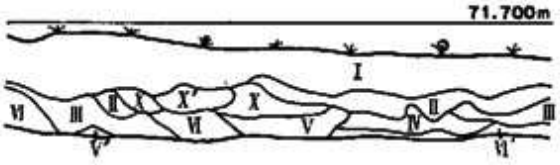
Ⅶ層；黄褐色粘土層（２）砂粒を多く含む。

Ⅷ層；火山灰層と黒色土層と粘土層の混入。

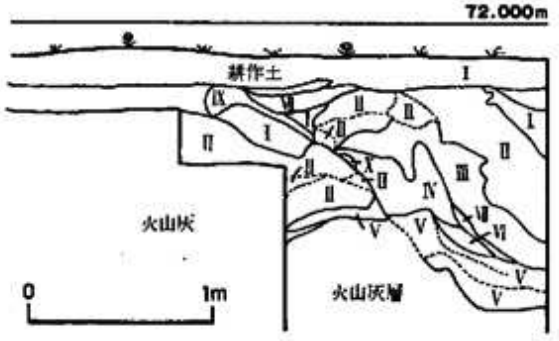
Ⅸ層；火山灰と黒色土層の混入。

Ⅹ層；炭化物。

1.　Ｄ－８区北壁セクション



2.　１－10区北壁セクション



第３図　地層堆積図

第3章　出　土　遺　物

本遺跡の各発掘区より得られた遺物は，前述の如く，何ら層位的な出土事実は得られてはいない。

遺構の類（住居址・墓壙等）もまた発見されていない。カク乱によるピット状の掘り込みは，数個発見されている。遺構としての条件を考えると何ら裏付けが得られていない。

確実に遺構とされるものがないにもかかわらず，土器・石器等の遺物は，非常に多く出土している。

前述した様に本遺跡は，発掘調査以前にその一部を除いて剝土，整地され壊滅している。この為，遺構はすでに破壊され壊滅してしまったとも考えられる。

以下，発掘によって得られた，遺物に関して概要を述べて行く。

第1節　土　　器

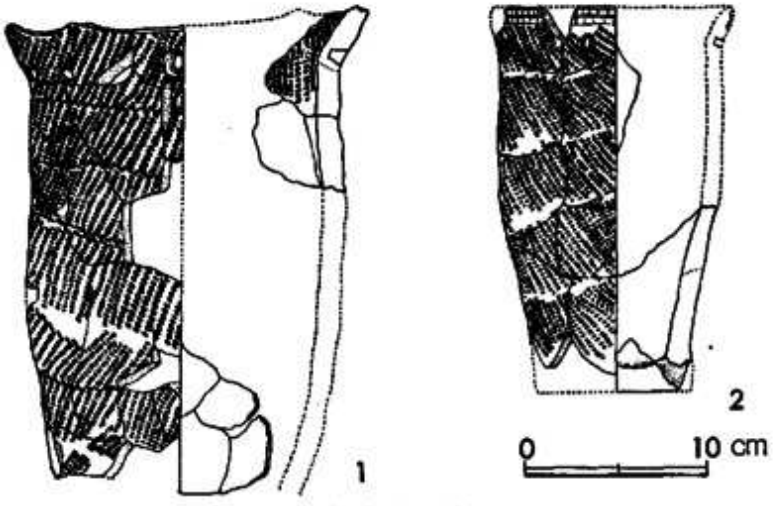
本遺跡より得られた土器は，縄文時代早期に属する，「貝殻文を特徴とする平底円筒土器」と縄文時代中期後半に位置する土器が混在して出土したものである。

縄文時代早期に属する土器は，数十片より得られていない。縄文時代中期に属する土器は，円筒上層土器の系統を引くと思われる一群を除いて，すべてかつて「北筒式土器」と称されていた，いわゆる朝日トコロ貝塚出土「トコロ6類土器」によって代表される土器群が圧倒的に多数を占めている。

ここでは，これらの出土土器を便宜的に分類し，説明を加えて行く。

完形土器（第4図）（図版4）

1　口径20cm，高さ現存部25cm，口唇部に6個の小突起を有する波状口縁となる。頸部にて若干くびれをみせ，胴部が若干膨んだ形となる。口唇上にへら状工具の先端を使用した連続刺突文を一条施文し，口縁部に直径5mm程度の円形刺突文（円面突瘤文）を，2～



第4図　完形土器実測図

3cm間隔にめぐらす。器面全体と口縁部内面に縄文を地文として施文する。

縄文原体は3～4cmの単節に撚った紐を使用し，一端に結節を有する。このため，器面には，あやくり文がみられる。

胎土中に直径5～8mm程の小石が多く含まれ，繊維を混入した痕跡がみられる。

焼成は，概して良好である。

色調は，口縁部より胴部下まで黒褐色，以下赤褐色となる。

器厚は，1.0cm内外である。

本遺跡出土第Ⅱ群土器に属する。

2　口径13.5cm，高さ21.0cm，口縁は平縁をなし，断面は三角形となる。

頸部にて若干のくびれをみせ，胴部が若干張み底部へと至る。底面は胴部より若干張り出す。底面は平らである。

口縁部にへら状具状を使用した連続刺突文が2条施文される。その下位に直径5mm程の円形刺突文（内面突瘤文）を2cmおきにめぐらす。

底部の下方を除いて器面全体に縄文を地文として施文する。

縄文原体は，3cm程の単節に撚った紐を使用する。

胎土中には砂粒を多く含み，若干の繊維を混入した痕跡が認められる。

焼成は，概して良好である。

色調は，茶褐色を量する。

器厚は，0.8cm内外である。

第Ⅱ群土器に属する。

第Ⅰ群土器（第5図）（図版5B）

今回の調査では，ほんの少数の土器破片より得られていない。

土器破片より推定して，器形は平底円筒形をなし，貝殻を施文具として「貝殻文」を特徴的に施文する土器群である。

貝殻の腹縁部を土器器面に押しあて，引っかく様にした「貝殻条痕文」を横位を主体に地文として施文する。

貝殻の腹縁部を口縁部に押圧し「貝殻腹縁文」を施文し，地文としての「貝殻条痕文」と組み合せとなる。（1～5，15）

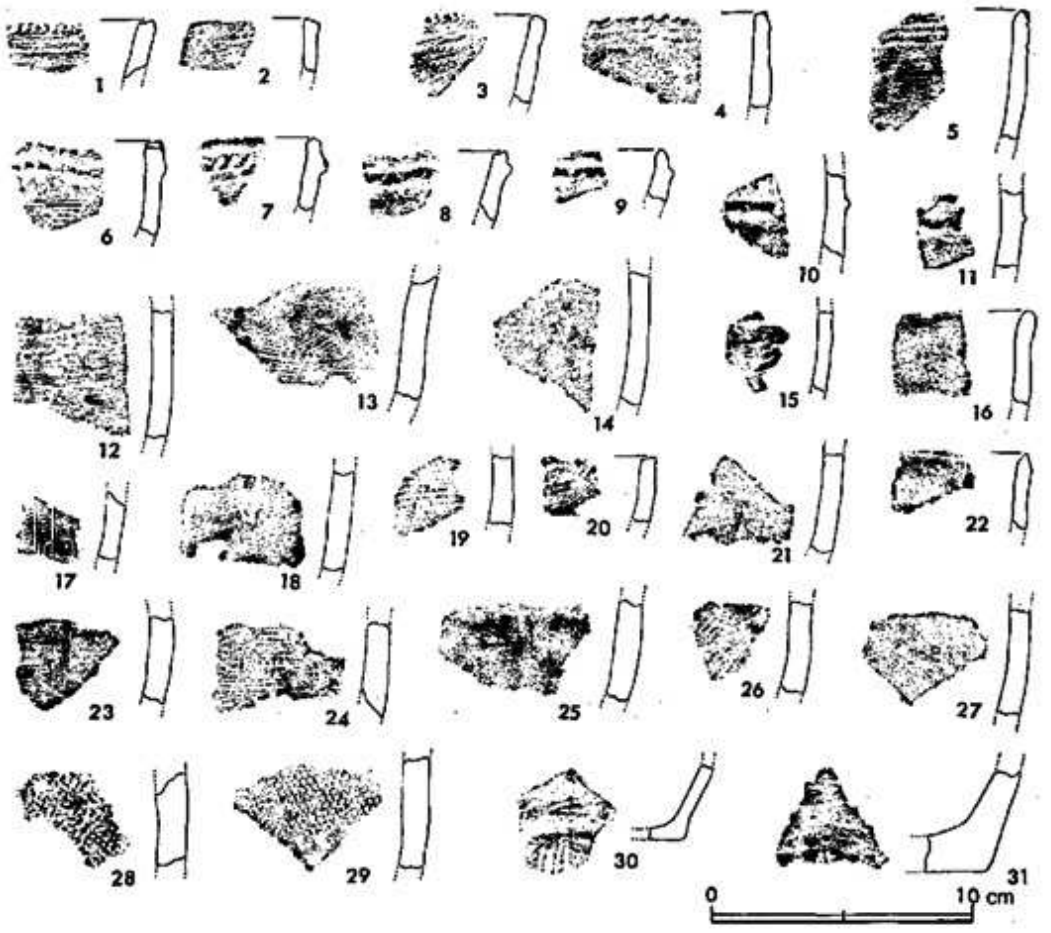
口唇下に一本の微隆起線文を作り出す。（6～11）

微隆起線上に連続的にきざみを付ける。（6～9）

口縁部は若干外反し，口唇上をへら状工具，あるいは指先等で削り取る様に平らに整形する。断面は若干内に傾むく角頭状をなす。(6.8)

ゆるやかな波状口縁となるものもある。（6）

口唇にきざみを連続的につけるもの，（1～3.5）



第5図 第Ⅰ群土器拓影

底部は，底面に沈線文状の文様がみられるもの（30）と平底で底面が胴部より張り出さないもの（31）等がみられる。

特異な文様を有する土器

くし歯状の刺突具を用い，連続的に土器器面に刺突（押圧）して，細い刺突文を器面一面に施文する。(28. 29)

貝殻文の一種とも思えず，本群土器とするのは，若干ためらいを感ずる。

胎土中には，全てに砂粒を含む。

焼成は，良好である。

色調は，赤褐色（4. 5. 12. 15. 27），黒色（7），灰褐色（28. 29）他は全て茶褐色を呈する。

器厚は比較的薄手であり，0. 5cm～0. 8cmである。

第Ⅱ群土器（第6. 7. 8. 9図）（図版6A，B図版7A，B）

地文として縄文を施文し，例外なく口縁部に円形刺突文（内面突瘤文）をめぐらす。

連続刺突文の有無・貼付帯の存在より3類に細分した。

A類（第6図）（図版6A）

口縁部を若干肥厚させ頸部に円形刺突文（内面突瘤文）をめぐらし，器面全体に縄文を地文として施文する。

頸部にめぐらす円形刺突文（内面突瘤文）の部位一帯を一種の擦り消し手法（指先き等でなでさする様にして）をもって地文の縄文を擦り消す。(1.11)

口縁部を大きく肥厚させ，若干外反する形となるもの（2.4.13.21）

口縁部を大きく肥厚させ，小突起を有する波状口縁となるもの（6.9.17）

口縁部に肥厚部が存在せず若干外反するもの（3.5.7.10.14.18）

口縁部内面にも縄文を施文する物が多くみられる。(1.2.7～9.13.20～22)

口唇上をへら状工具にて連続刺突文を施文するもの（8 10）もみられる。

器形は，土器破片より推定して，口縁部が大きく肥厚する物，小突起を有する波状口縁となる物，平縁の物がみられ，頸部にて若干くびれ胴部が若干膨る円筒形の深鉢形を呈すると思われる。

胎土中には全てに大粒の砂礫を含んでいる。繊維を混入した痕跡がみられる土器破片が多い。(1.2.6.10.17.20.21.23)

焼成は，概して良好といえる。

色調は，灰白色（1.5.9.13.22）の物を除いて，他は全て褐色を呈する。

器面及び内面に炭化物が付着しているものがみられる。(4.6.10～12)

器厚は，0.8cm～1.2cmである。

B類（第7．8図）（図版6B，図版7A）

地文として縄文を施文し，口縁部に2段，3段の連続刺突文をめぐらし，頸部近くに付けられる円形刺突文（内面突瘤文）との組み合せとなる。

口縁部に発達した肥厚帯を有するもの（1.2.5.13.19）

肥厚帯上にも円形刺突文（内面突瘤文）を付けるもの（1.7）

口縁部に発達した肥厚帯を有し，小突起のある波状口縁となるもの（23.24.27.29.31.38.42）

口縁部に肥厚帯が全くみとめられず，若干外反する形となるもの（25.26.30.32～37.39～41.43）

肥厚帯上，円形刺突文（内面突瘤文）上にも連続刺突文を付け胴部にまで連続刺突文を付けるもの（4）

口唇上にも連続刺突文を付けるもの（28）

口縁部内面にも連続刺突文を付ける（22）

口縁部内面にも縄文を施文するものが多い。(1～3.8.9.11.17.19～22.28.35.39.40.43)

44～47は，連続刺突文のある胴部破片である。47は，内面にも縄文が施文される。

胎土中には全て多量の大粒の砂礫を含んでいる。繊維を混入したとみられる痕跡が認められる破片が多く存在する。(1.2.8.20.24.26～28.30.31)

焼成は，概して良好である。

色調は，赤褐色（3），黄褐色（14.17.25.28.42），灰褐色（38.41.43.47）を呈する物以外は，全て黒褐色である。

器厚は，1.0cm～1.2cmである。

器形は，A類とした土器群と同様の形となるであろう。

C類（第9図1～10）（図版7B）

今回の調査では，わずか十数片の土器破片より得られていない。

口縁部に発達した肥厚帯を有し，肥厚帯上にへら状工具等による連続刺突文を数段施文する。頸部に円形刺突文（円面突瘤文）を例外なくめぐらし，細い貼付帯をもって器面を装飾する。

小突起を有し，波状口縁となるもの（3.4）

口縁部を貼付帯によって装飾し，貼付帯上と口縁部に連続刺突文を数段施文し，円形刺突文（内面瘤文）との組み合せとなるもの（5）等がみられる。

貼付帯上をへら状工具によって，連続刺突文を施文する（1～3．7～10）

口縁部内面に縄文を施文する土器が多い。（1～3.5.9）

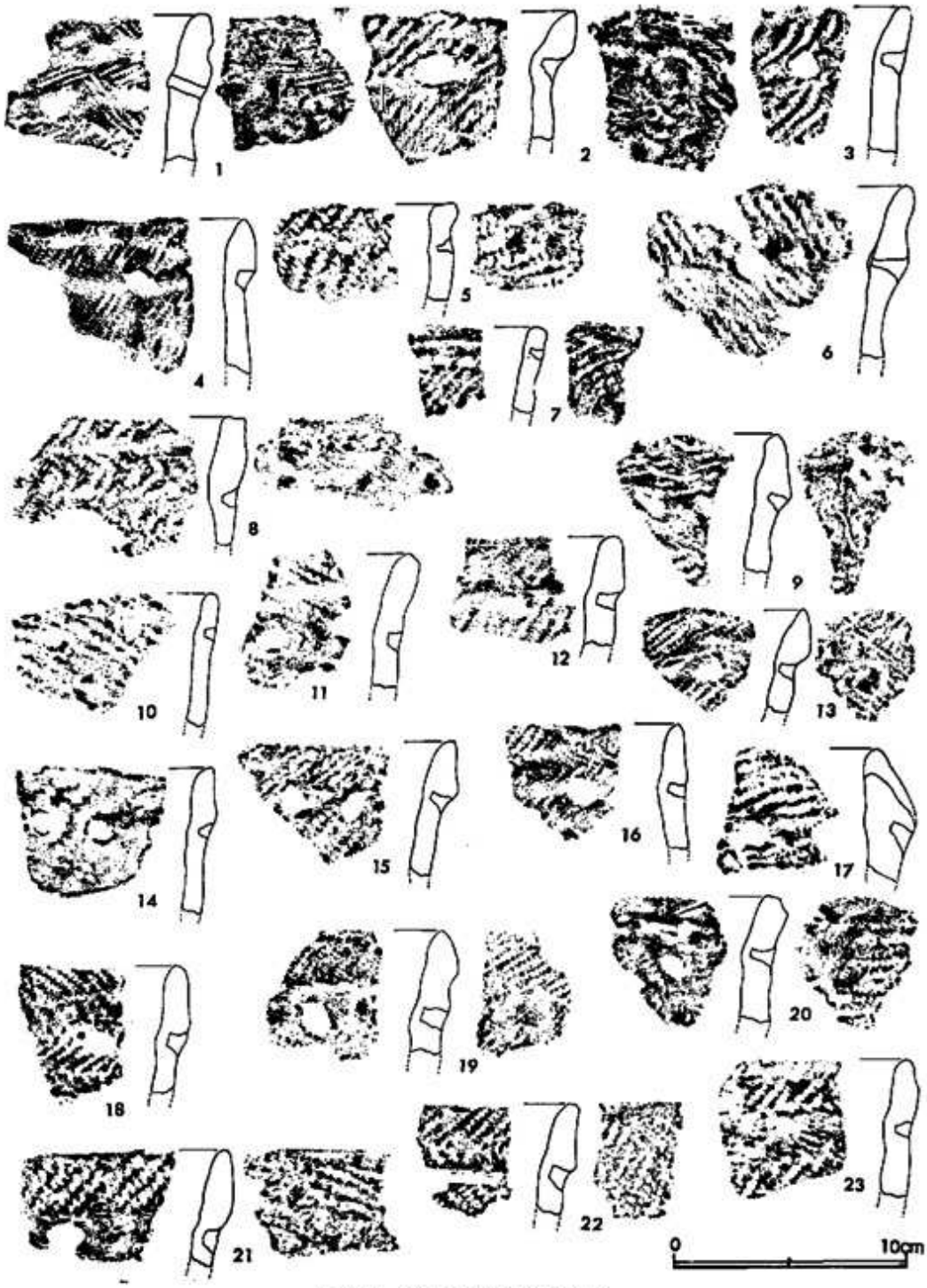
胎土にはすべて砂粒を含み，繊維を混入した痕跡が認められる物は少ない。（4）

焼成は良好である。

色調は，ほとんど灰褐色を呈する。

器厚は，0.8cm～1.5cmである。

器形は，A類・B類の土器群と同様の形をなすであろう。



第6図　第Ⅰ群土器拓影（A類）

第7図　第Ⅱ群土器拓影（B類）

第8図　第Ⅱ群土器拓影（B類）

第Ⅲ群土器（第9図11～23）（図版7B）

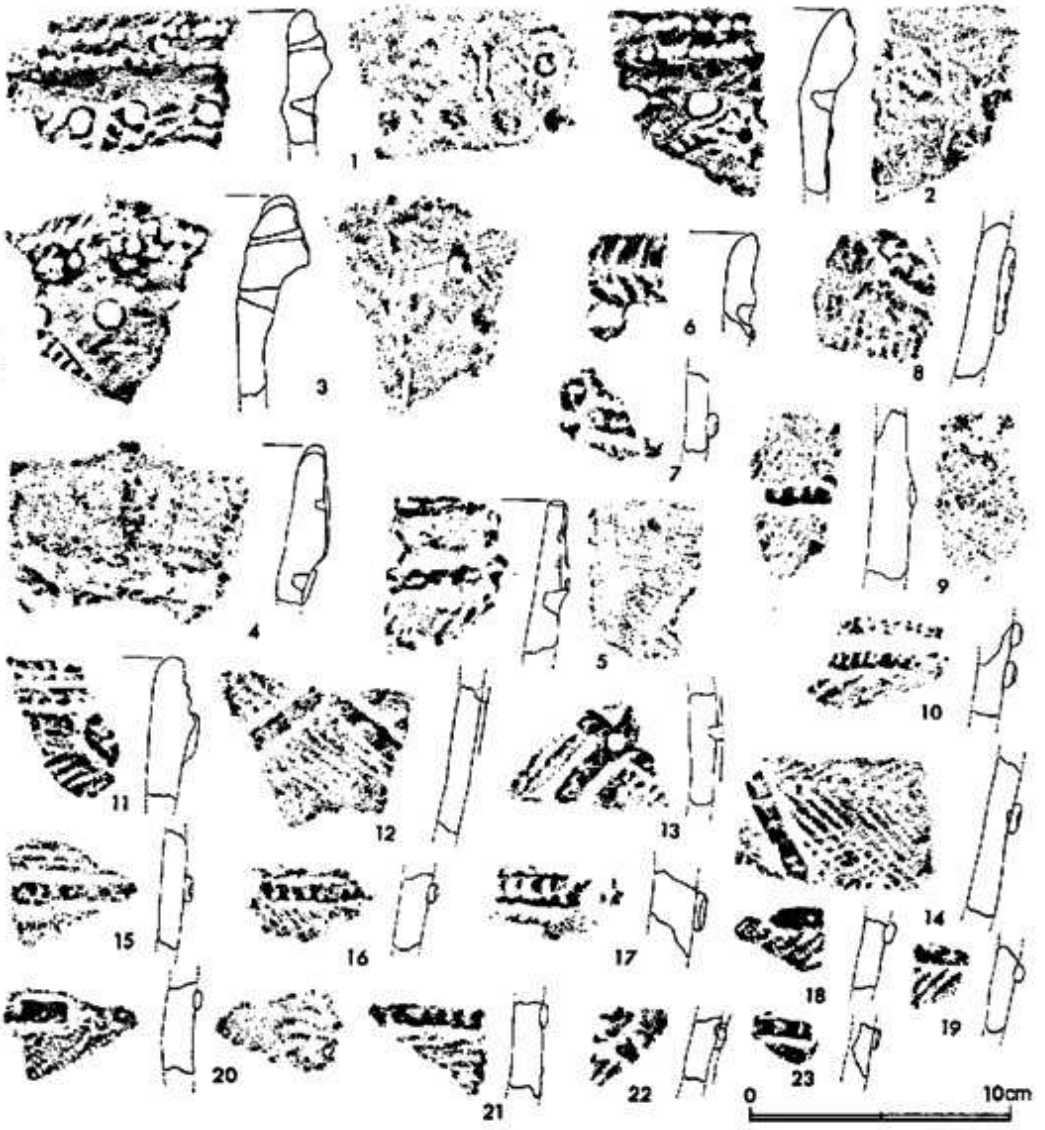
地文として縄文が施文され，貼付文，貼付帯によって土器器面を装飾する。

口縁部が肥厚し，へら状工具による連続刺突文が肥厚帯上に2段施文され，ボタン状の貼付文が付けられる。(11)

地文として縄文が施文され，胴部に細い貼付帯を十文字に貼りつけその交点を丸棒状の刺突具にて円形の刺突文を施こす。(12，13，22)

貼付帯上に連続刺突文を施文するもの（15～17，21，23）がみられる。

土器内面にも縄文を施文するもの（20）がある。



第9図　第Ⅰ群土器（C類），第Ⅲ群土器拓影

地文として施文される縄文は，14の羽状縄文を除いて，他はすべて斜行縄文となる。

胎土中には全てに砂粒を多く含み，繊維を混入した痕跡のあるものはない。

色調は，すべて暗褐色を呈する。

器厚は，0.8 cm～1.2 cm である。

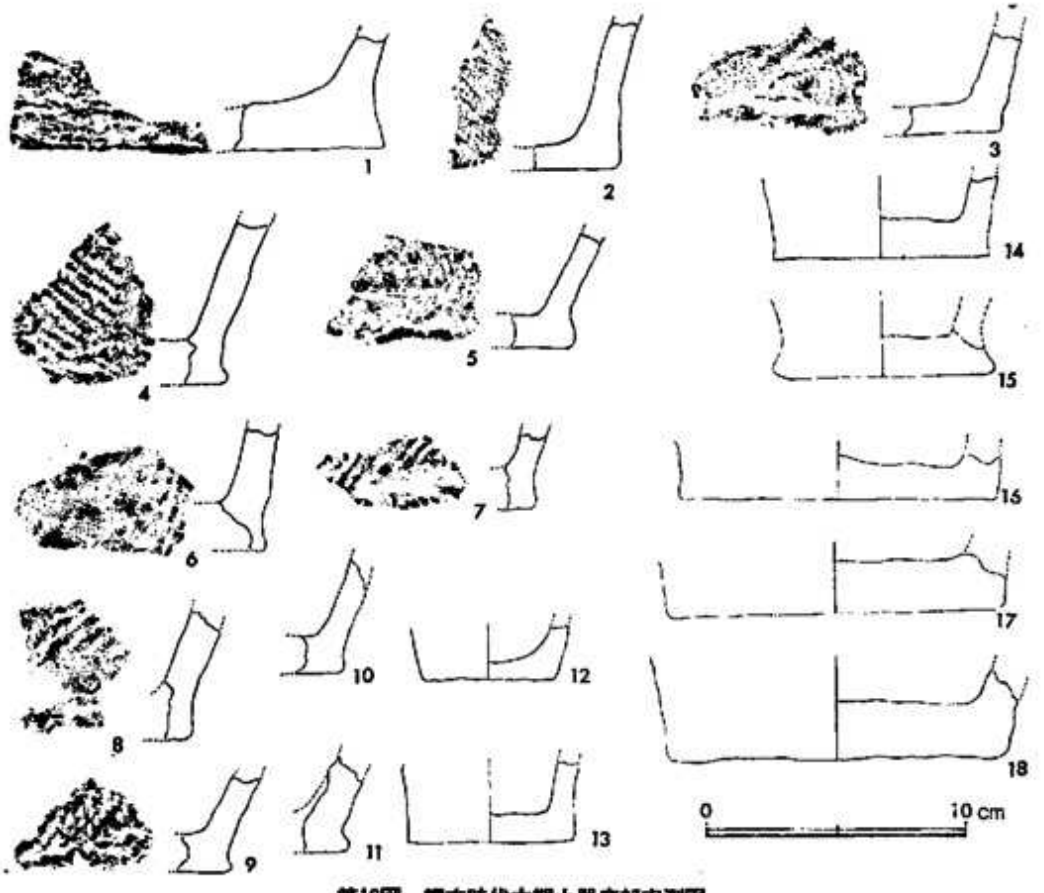
縄文時代中期土器底部（第10図）

良好な資料は少ない。

大きく分類して，２つの形が存在する。

胴部より底面に到る直前に大きく外反するもの（1，2，4～6，8～11，13）とそうでない形を呈するもの（3，7，12，14，15）である。

底面は，全て平坦である。



第10図　縄文時代中期土器底部実測図

以上出土器について，第Ⅰ群土器より第Ⅲ群土器に分類しその内容を概述した。

次にこれらの土器群が，北海道における縄文時代研究の成果の中でどういった位置付けが得られるのか，簡単に以下述べて行こう。

第Ⅰ群土器

今回の調査では，わずか数十片の土器破片より得られなかった。

器形は，土器破片よりの推定であるが，平底円筒形をなし一部には波状口縁を有する物も存在する。

貝殻を施文工具として使用し，土器器面に横位を主体にした「貝殻条痕文」・「貝殻腹縁文」を施文する。

いわゆる「貝殻文を特徴とする平底土器群」に属する。

これらの特徴を有する土器は，道央部においては，アルトリ遺跡(竹田　1956)・虎杖浜遺跡（大場・竹田・扇谷　1962)・道東部においては，大樹遺跡（大場・棚瀬　1965)・平和遺跡（大場・明石　1968・1970)・沼尻遺跡（沢　1962，沢・西　1973）出土の土器等があげられる。

本群土器との比較を試みると，アルトリ遺跡，虎杖浜遺跡にみられる土器は，沈線文，列点文が特徴的にみられる。アルトリ遺跡出土土器には，波状口縁のある物は非常に少ない様である。本遺跡出土の土器とは，文様構成等をみると大きく趣を異とする。

大樹遺跡出土の土器は，絡条体圧痕文・撚糸文・貝殻文・沈線文のある物と，文様構成をみると非常にバラエティに富んだ土器群を構成している。報告者は，縄文土器以外は一括して「大樹式土器」と呼称している。

平和遺跡出土の土器も，土器底面にホタテ貝の背面圧痕のある無文土器をはじめとして貝殻文・列点文・沈線文・微隆起線文を有するグループと非常にバラエティに富んだ土器群を構成している。

報告者は，上記の無文土器を「下頃部下層式土器」，下記のバラエティに富んだグループを一括して「下頃部上層式土器」と分類している。

「下頃部式土器」は示準遺跡の下頃部遺跡の報告が正規になされていない為明確に実体をとらえる事はむずかしいが，横位に施文される，へら状工具による幅広の沈線文が特徴であるという。

平和遺跡出土の土器を「下頃部上・下層式土器」とする分類は，本来の「下頃部式土器」の概念規定より大きく逸脱したものと考えざるを得ない。

沢によれば，地域性という事を考慮しても平和遺跡出土の土器は，「沼尻式土器・東釧路Ⅰ式土器・大楽毛式土器に近い土器の集合体」であるという。(沢　1969 a)

これらより考えても，平和遺跡出土の土器群は，さらに細分され確実に否定されうる土器形式が数形式存在する可能性が考えられより。

同様の事は，先きにあげた「大樹式土器」のバラエティに富んだ土器群にもいえよう。

沼尻遺跡出土の「沼尻式土器」は，横位に施文された貝殻条痕文に貝殻腹縁文，列点文（刺痕

文）が組み合されるといった特徴を有する。

本遺跡出土土器第Ⅰ群土器は，大樹遺跡出土土器（報告書「大樹遺跡」第31・32・40・46・49図中に示される土器）・平和遺跡出土土器（報告書「平和遺跡第1集」第21，22図中に示めされる土器・報告書「平和遺跡」第34図第10号竪穴出土土器・第35図第11号竪穴出土土器）・沼尻遺跡出土の「沼尻式土器」に多くの類似点が見い出される。

特に「沼尻式土器」には，口唇上を削り取ったかの様に整形し断面をみると口唇部が三角形に近い形となる様にする手法がみられる。こういった特徴は，本群土器の口唇上をへら等で平らに整形する手法と非常に類似している。

本群土器は，「沼尻式土器」に最も近い様相を示しているといえよう。

「貝殻文を特徴とする平底土器群」は，道央部より，道東部にかけて広く分布しているようである。特に道東部に，その分布が密であるという。

いわゆる「平底土器群」に関する研究は，吉崎（吉崎　1965）・沢（沢　1969）・木村（木村　1967）により行われ，最近に至って本格的にその編年的作業が試みられる様になった。

現在進行中のこれらの研究より考えて，「平底土器群」は，少なくとも6～7グループに細分されそうである。

(1)　土器底面にホタテ貝の背面圧痕文がある土器，暁遺跡より得られた「暁式土器」（河野　1961）。ホタテ貝の背面圧痕文はみられないが「暁式土器」に器形・縦に走る条痕様の文様がきわめて類似する「テンネル式土器」（沢　1964）のグループ。

(2)　下頃部遺跡より得られた，へら描きの太い沈線文が横位に施文される「下頃部式土器」によって代表されるグループ。

(3)　平縁・波状口縁であり，貝殻条痕文が横位に施文され貝殻腹縁文，沈線文，列点文等が組み合わされて施文される「沼尻式土器」によって代表されるグループ。

(4)　「沼尻式土器」に非常に近い器形・文様を有するが，沈線文・貝殻腹縁文が特徴的に出現する「虎杖浜式土器」のグループ。

虎杖浜遺跡では，粗雑な作りの丸底に近い尖底の土器が伴に出土しているという。（大場・竹田・扇谷　1962）

(5)　波状口縁がごくまれにしかみられず，列点文，沈線文がきわめて特徴的にみられる「アルトリ式土器」のグループ。（竹田　1956）

(6)　貝殻文を有する土器群より若干新しく位置付けられようが，東釧路貝塚出土の第Ⅱ・Ⅲ式土器と称される撚糸文・絡条体圧痕文，組紐圧痕文が特徴とされる縄文土器のグループ。（河野・沢・岡崎・山口　1962）この土器群になると全道的にその分布の範囲を広げるようになる。

まず，吉崎の考えによると「下頃部式土器」を最も古く次に「沼尻式土器」を，「虎杖浜式土器」は「沼尻式土器」とほぼ並行であり「アルトリ式土器」はこれらよりやや新しく位置付けられ，「沼尻式土器」以降に「東釧路Ⅱ・Ⅲ式土器」のいわゆる縄文土器が存在するとの編年を記しているが，確たる根拠は示してはいない。（吉崎　1965）

沢は，道東域特に「釧路地方」を主に豊富な資料を駆使して精力的に研究の成果を発表している。最も新しい編年によると「沼尻式土器」を最古の土器にあげ，「東釧路Ⅰ式土器」→「大楽毛式土器」→「テンネル式土器」→「浦幌式土器」→「東釧路Ⅱ式土器」→「東釧路Ⅲ式土器」へ至るという。(沢　1969 a)

木村は，道東部において「平底土器群」にしばしばみられる「石刃鏃を有する特殊な石器群」に関連してその研究の一端を発表している。

これによれば，先きに記した吉崎による考え方と基本的には一致している様に思われる。

まず「下頃部式土器」よりさらに先行するグループとして「暁式土器」・「テンネル式土器」をあげ，以下「大楽毛式土器」→「沼尻式土器」→「東釧路Ⅱ式土器」→「東釧路Ⅲ式土器」の序列が考えられるという。さらに「虎杖浜土器」は「沼尻式土器」とほぼ並行関係に位置するという。(木村　1967)

「暁式土器」・「テンネル式土器」を最古の土器群とする根拠として，「テンネル式土器」に付けられる縦位に走る半截竹管状工具によると思われる条痕文が釧路地方での平底土器群の土器形式「沼尻式土器」→「東釧路Ⅱ式土器」→「東釧路Ⅲ式土器」へと至る系統中どの文様要素にも属するとは考えられず，それらよりさらに先行する土器と考え，さらに類似した器形・文様を有する「暁式土器」も同様の位置付けが得られるという。

また「暁式土器」を出土した暁遺跡では，「多面体彫器（峠下形彫器）」をはじめとして一般の縄文時代とはちがった特異な石器組成をもっている。(明石　1965)

この石器群は，先土器時代終末における石器と類似する資料が含まれているが，組成全体からみると大きく趣をちがえており縄文時代早期の平底土器群への過度期としてとらえることより「テンネル式土器」との対比が矛盾なくされるとしている。

「虎杖浜式土器」と「沼尻式土器」が並行関係にあるとの事は，文様構成・器形がきわめて類似している点，C^{14}測定値よりみても，「虎杖浜式土器」が7700年±200ＢＰ（大場・Ｃ・Ｓ・チャード 1962)，「沼尻式土器」が7130年±120ＢＰ（沢　1969 a）とほぼ近い年代を示めしており妥当性を有していよう。

「テンネル式土器」の位置付けをめぐって，沢，木村の編年概要は大きく差異を見せている。竹管文が特徴とされる「トコロ14類土器」等の関連からすると，木村のいう「テンネル式土器」を最古の土器とする序列は，説得力のある，無理のない理解と思われる。しかしこの類の土器は，今もって層位的に確認されてはいない。

今後層位的にも適確にとらえられる遺跡の発見によってその位置関係は明らかにされよう。

当該時期に関する研究は，最近に至って本格的に行われる様になって来たが問題点も多く残している。

遺跡も多く発掘されているのだが，正規に報告がなされていない物もみられる。その弊害とも思われるが土器形式そのものであいまいに理解され，乱雑な分類がなされる例がみられる。

この様な状況では，先に記して来た諸氏の論より進める事に困難といえよう。

今後の研究の課題として，従来よりの土器形式の分類の再考をまず考えなければならない様な段階と思える。

第Ⅰ群土器

地文として縄文を有し，口縁部に例外なく円形刺突文（内面突瘤文）をめぐらす。

器形は，単純な円筒形で深鉢形をなす。

かつては，「北筒式土器」と称されていた，いわゆる「朝日トコロ貝塚出土第6類土器」によって代表される土器群である。

本遺跡にて得られた本群土器に属する物は，文様等により3類に細分された。

（A類） 縄文のみ施文され，円形刺突文（内面突瘤文）が口縁部にめぐらされるグループ。

（B類） 地文として縄文を有し，口縁部に2，3段の連続刺突文が付けられ口縁部にめぐらす円形刺突文（内面突瘤文）との組み合わせとなるグループ。

（C類） B類としたグループと同様に，口縁部に連続刺突文と円形刺突文（内面突瘤文）が組み合わされて施文され細い粘土紐による貼付帯がみられるグループ。

「トコロ6類土器」の従来までの研究では，A類・B類とした土器に於ける文様的な差は明らかにされているが時間的な差異は無い物として一括して考えられている様である。「トコロ貝塚」に於いても，明確な層序における出土差はみられなかった様である。

A類土器・B類土器の差は，連続刺突文の有無のみで地文としての縄文・円形刺突文（内面突瘤文）は共通している。

B類土器に施文される連続刺突文の施文方法は，円筒上層式土器の系統を引く土器群（例えば「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化した土器群といわれる「平岸天神山」出土の土器，「智東B式土器」等）に付けられる半載竹管状工具による連続刺突文と全く同様な手法で施文される。後に記すが，桑原がいう様に「トコロ6類土器」が「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化した土器群（特に智東B式土器）の強い影響をうけて発生したとされるならば連続刺突文の存在はその事を強く暗示している様にも思える。

C類とした土器は，形態，文様に関しては，B類土器と同様であるが，細い粘土紐による貼付帯の存在が特徴とされる。

細い貼付帯の存在する土器は，「トコロ6類土器」にあまりみられない様である。

C類土器と全く類似する資料は，由仁町古山遺跡第1地点（野村 1967）出土の土器があげられる。古山遺跡第1地点出土の土器は，「余市式土器」と解説されているが確たる根拠は示されてはいない。

ここでは，貼付帯を除くすべての要素は「トコロ6類土器」そのものである点に留意し，特異な文様を有する。「トコロ6類土器」と考えたい。ここで問題にされるのは，貼付帯の存在である。「トコロ6類土器」に最も近い土器群にそれを求めると，円筒上層式土器の系統を占める「サイベ沢Ⅵ式土器」・「サイベ沢Ⅶ式土器」等に良くみられる。先きにも記したがこれらの地方化した土器

群が「トコロ6類土器」発生になんらかの強力な影響を与えたとするならば，B類土器にみられる連続刺突文の存在とともに円筒上層式土器よりの伝統とも考えられよう。またC類土器のように円形刺突文（内面突瘤文）・口縁部に数段付けられる連続刺突文はみられないが，細い粘土紐による貼付帯の存在が非常に類似する資料が網走大曲洞窟より得られている（児玉・大場　1955）。この土器は報告者により「北筒Ⅰ式土器」と呼称され，いわゆる「トコロ6類土器」に先行する土器として考えられている。桑原もまた彼自身の分類で第Ⅱ群土器としてこの土器をあげ「トコロ6類土器」に先行する土器と考えている（桑原　1966）。桑原による第Ⅱ群土器すなわち「北筒Ⅰ式土器」と「トコロ6類土器」との関連は，今だに明確にされてはいない。本遺跡に得られたC類土器とした貼付帯を有する「トコロ6類土器」がこれらの間に存在する物であろうか。しかし，「北筒Ⅰ式土器」・本遺跡・古山遺跡第Ⅰ地点にて得られたC類土器ともに現在得られている資料が非常に少なく，器形・文様に関しても推論の域を脱けない状態である事によりまだ問題点を多く残していよう。

「トコロ6類土器」の分布状況は，道央部（石狩低地帯）より道東北部にかけて分布しており，特に道東北部にその分布は集中するという。

本遺跡を中心とした石狩低地帯との付近の遺跡をあげると，平岸坊主山遺跡（畑　1969）・白石神社遺跡（札幌市教委　1973）・浜益川下遺跡（大場・石川　1961）がある。

石狩低地帯以東に於いては，特に日本海沿岸地帯に於いて「余市式土器」・「円筒上層式土器」を主に出土する遺跡にてわずかながら少数の「トコロ6類土器」が出土している例が報告されている（大場・桐井　1958）。

石狩低地帯以西には，ほとんどその分布は知られていない。

当該時期に関しては，桑原（桑原　1964・1966）・吉崎（吉崎　1965）により新境地が開かれ，最近高橋によってほぼ集大成されたといって良い労作が発表されている（高橋　1972a・1972b）。

先に若干記したが桑原によれば「トコロ6類土器」は，かつて「北筒式土器」と称された土器群中最古の土器であるという。これは「トコロ貝塚」の調査結果より考えても妥当性を有するであろう。さらに円筒上層式土器よりの関連からすると「浜益川下遺跡」での層序結果より「サイベ沢Ⅵ式土器」より先行する事はありえず，「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化した土器群いわゆる「平岸天神山出土の土器」（菊地　1967）・「智東B式土器」（山崎　1966，山崎・長谷川　1968）・「嵐山遺跡出土第C～H類土器（斎藤他　1968）等の強い影響を受けて「トコロ6類土器」が発生したという。

さらに「トコロ6類土器」の分布状況が最古の土器であるにもかかわらず石狩低地帯をも含めた道東北部にまで広い範囲に分布しているのに対して，これに後続する「トコロ5類土器」に至ってはその分布が道東北部に限られその範囲はかえって縮少する点に留意し「トコロ6類土器」は，石狩低地帯と密接な関係をもって発生し，漸次道東北部にその分布の範囲を広げていったと考えている。

これらの点に関しては，高橋もその見解を一致させている。

「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方化したタイプといわれる土器群は，「トコロ6類土器」と密接した関連を有して石狩低地帯より道北部にかけてみられる。これらより考えても桑原・高橋の見解は，妥当性があろう。

「トコロ6類土器」が石狩低地帯と密接な関連をもって発生し，道東北部にかけてまず分布していったとするなら，石狩低地帯以西に「トコロ6類土器」の分布がみられない理由も若干だが明らかにされよう。

円筒上層系の文化は，「サイベ沢Ⅵ式土器」に至ってその分布範囲を拡大し，旭川付近にまでその足跡を残している（斎藤他　1968）。これに後続する「サイベ沢Ⅶ式土器」の地方形である「智東B式土器」は「トコロ6類土器」の発生に強い影響を与えた，こうして発生した「トコロ6類土器」の一部は，日本海沿岸，岩内地方にまで入り込んだ。

半島部に於ける円筒土器群は，「サイベ沢Ⅵ式」→「サイベ沢Ⅶ式」→「見晴町式」（高橋　1966）と変化し，石狩低地帯をはさんで「トコロ6類土器」によって代表される文化圏と対立関係に至ったと考えられる。

「トコロ6類土器」は，すでに前記したが「円筒上層式土器」との関連から考えても，縄文時代中期後半に栄えた土器群である事が結論される。

若干数だが「トコロ6類土器」が，縄文時代前期後半に位置したとする考えもある（八幡　1963　大場　1969）。

いずれの論考も「トコロ貝塚」を形成した大量のカキ殻を縄文海進によるものと規定し，縄文海進が最大に進んだ時期―縄文時代前期後半に「トコロ貝塚」が形成されたと考えている。

これらの論考は，前記の高橋により徹底的に反論が加えられている。高橋は，網走湖及びその付近の地形的研究を発表している湊正雄の論を引用し，網走湖が最大に進んだ海進におおわれたのは，アサリ時代であり，次にカキ時代がありその時点ではすでに海が後退した時期であった事より「トコロ貝塚」が形成された時期は，縄文時代前期後半より新しい時期であり，縄文時代前期後半という論の根拠を根底からくつがえしている（高橋　1972b）。この論は，妥当性を有する正論であろう。

以上若干だが，本遺跡出土の第Ⅱ群土器とした「トコロ6類土器」に関し記して来た。本群土器に関しての論は，すでに記した様に桑原，吉崎，高橋によってその概要は，充分論議されつくしたかの様である。

しかし，本群土器に伴う生活遺構等に関する研究はまだ本格的とはいえない。住居址に関しては，「女満別町住吉遺跡」（大場・加藤　1960）に発見された，段のある円形に近いプランを有する竪穴住居址がみられる程度で良好な資料に欠けている。

また土器以外の生活遺物（例えば石器類・骨角器類）の研究もおくれている。「トコロ6類土器」を出土する遺跡は，石狩低地帯より道東北部にかけて広く分布しているにもかかわらず，個々の遺跡の規模が小さいか，あるいは他時期の物と混在して発見される例が多い為であろうか。

これらは，今後の研究に残された課題となろう。

第Ⅲ群土器

地文として縄文を有し，細い貼付帯をもって土器器面を装飾するといった特徴を有する。

第Ⅱ群土器C類とした土器にも細い貼付帯が付けられている。しかし，貼付帯による文様構成，胎土，焼成に至ってはいちじるしく差位が認められ本群土器とは明確に区別される。

ボタン状の貼付文を有し，口縁部が肥厚しその上に連続刺突文を施文する口縁部破片が1点のみ見られるが他は全て細い粘土紐による貼付帯を有する胴部破片である。従って，器形，文様構成に至っては不明の点が多い。

細い粘土紐による貼付帯を特徴とする土器を，縄文時代中期を中心として考えると「余市式土器」・「サイベ沢Ⅵ・Ⅶ文化層出土の土器」があげられる。

「余市式土器」の場合，口縁部から胴部にかけて，土器を一周する貼付帯を数条付け，さらに貼付帯上に縄文を施文する。

本群土器の文様構成は，貼付帯を十文字に付けその交点に円形刺突文を付けるといった特徴を有する。さらに貼付帯上には，縄文は施文されずへら状工具の先端にて連続刺突を行う。「余市式土器」とは，大きく趣を異とする。

「サイベ沢Ⅵ・Ⅶ式土器」は，サイベ沢遺跡においてその特徴を充分に明らかにしたとはいいがたい。

「サイベ沢Ⅵ式土器」と現在明確に把えられた資料としては，浜益川下遺跡（大場・石川　1961）出土の土器があげられる。しかし周辺地域の遺跡のため純粋な物とはいえない。「浜益川下遺跡」出土の土器は，山形突起を有し肥厚した口縁部をもつ，口縁より胴部にかけて細い粘土紐による貼付帯によって装飾する。口縁より垂下する数条の貼付帯と，胴部を横走する数条の貼付帯が交差する，その交点にドーナツ状の貼付文を付ける。貼付帯上には，へら状工具の先端を押圧したきざみに類する文様を施文する。本群土器の文様構成とは類似点がかなり見い出される。

「サイベ沢Ⅶ式土器」の特徴は，文様・器形的には「サイベ沢Ⅵ式土器」とかなり類似している様である。

「サイベ沢Ⅵ式土器」と同様に，山形突起を有し，突起に孔や粘土塊を貼付する物が多くみられる。文様構成に関しても胴部中央にまで文様が広がり，貼付帯及び沈線文が2本単位を基本に施文される。貼付帯は「サイベ沢Ⅵ式土器」にみられる物よりずっと細くなり，数も少なくなるという。

本群土器は，浜益川下遺跡出土の「サイベ沢Ⅵ式土器」と文様構成等においては類似点がかなり見い出される。

貼付帯が細くなる点，貼付帯の交点に付けられるドーナツ状の貼付文が円形刺突文におきかえられると，浜益川下遺跡の「サイベ沢Ⅵ式土器」より若干新しい時期の所産と考えられ，「サイベ沢Ⅶ式土器」に非常に接近した時期の所産と思われる。

土器の出土数があまりに少なく，土器自体の概要がごく一部分しか理解できなかった。

本遺跡出土の第Ⅱ群土器とした「トコロ6類土器」によって代表される土器群との関連を考える

と，ほぼ並行関係にあったのではと推測されよう。

第2節 石　　器

本遺跡からは，約200点に及ぶ石器類が得られている。

その器種は，石鏃，小型有柄尖頭器，石槍，両面加工のナイフ状石器，掻器，剥片より作られた削器，石錐，石核，石斧，石錘，砥石，たたき石，くぼみ石，台石，石皿，擦り石等である。

本遺跡出土の土器は，前述した第Ⅱ群土器が主体をなし，第Ⅰ，Ⅲ群土器は若干数混入の状態で出土したものである。

本遺跡より得られた石器群は，そのほとんどの物が第Ⅱ群土器に伴ったと考えられる。

石器類を，形態，機能別に分類し以下説明を加えて行く。

意図的に生産されたと思われる，縦長剥片が多量に出土している。

石器の素材として，作り出された可能性も多分に考えられるが，それ自体使用痕等が認められない縦長剥片が多量に出土している。これらについての剥離過程，技法等にも若干の考察を加えた。

Ⅰ　石　　鏃（第11図1～3）（図版8A）

表採資料を加えても，3点より出土していない。

全長22～34mm，最大幅1.25mm～1.6mm，重量0.7～1.5gで全例黒曜石製である。

両面加工が入念に施こされ茎が作り出されている。逆刺は強くはない。尖端を欠損している。（1）

幅広剥片を素材に，先端と基部に簡単な加工を施こす。有茎である。（2）

縦長剥片を素材に，両端に尖頭状の加工を施こす。胴部にて両側縁よりえぐりを入れる，両頭の石鏃に類似する形状となる。（3）

Ⅱ　小型有柄尖頭器（第11図4～16，20）（図版8A）

石鏃に比較して，全体に幅広で長さも，5cm内外と大型となる。すべて有柄である。

尖頭部の長さと最大幅の比をとると0.7～1.2（±1）となる。重量は4.0～7.0g，全例黒曜石製である。

逆刺の程度，尖頭部の形状より3類に分類した。

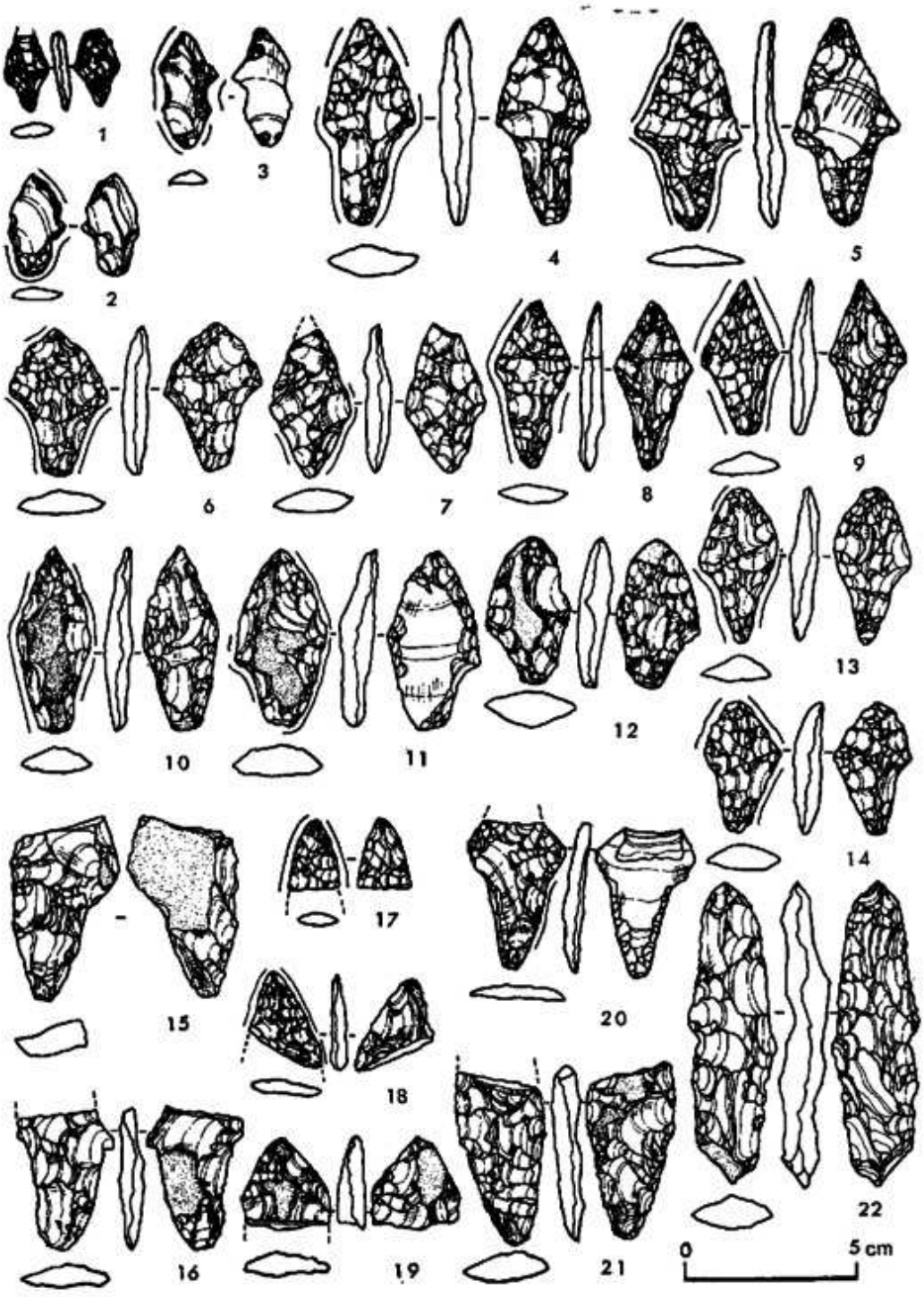
Ⅱ－a類（6，8，14）

逆刺は，比較的強いとはいえないが刃部は，幅広となる。

尖頭部の長さと最大幅の比は，0.7～0.9（±1）となる。重量は，4～6gである。

6は，両面加工が入念に施こされる。刃部は幅広で，a面左上部と，柄部両側縁に細かい加工が集中している。

8は，両面加工が入念に施こされるが6面中央に素材面を残している。a面左側縁に細かい加工



第11図　石器実測図（石鏃・小型有柄尖頭器・石槍・尖頭器破損品）

が集中している。

14は，入念に両面加工がなされ，a面左の逆刺の方が強く，左右は非対称形となる。尖頭部両側縁と柄部a面右側縁に細かい加工が集中している。

Ⅱ-b類（4，5，9，11～13）

尖頭部の長さと最大幅の比が1.0～1.1（±1）の枠内に収る物である。最大幅と尖頭部の長さがほぼ同一となる。

4，5は，比較的大形で全長6cm，重量も10g程ある。4は入念に両面加工がなされた左右は対称形となる。尖頭部両側縁と柄部全体に細かい加工が集中している。5は，半両面加工で，6面に大きく第1次剥離面を残している。逆刺は強く，左右は非対称形である。尖頭部a面左側縁と柄部両側縁に細かい加工が集中している。

9は，半両面加工で6面に第一次剥離面を残し平坦となる。逆刺は比較的強い。

11は，半両面加工で，a面に素材面，b面に第1次剥離面を残している。

12は，半両面加工でa面中面とb面尖頭部に素材面を残している。a面左側縁が若干張り出し逆刺となる。未成品かとも思える。

13は，入念に両面加工が施こされ，a面左側縁の逆刺が発達しており，左右は非対称形となる。柄部両側縁に細かい加工が集中して見られ，柄部が細い特徴を有する。

Ⅱ-c類（7，10）

比較的細身で逆刺がほとんど認められない資料である。

尖頭部と最大幅の比は，1.22（±1）となる。重量は，45～53gである。

7は，両面加工が入念に施こされ，a，b両面に少く第1次剥離面を残している。尖端を欠損しており，基部は尖っている。

10は，縦長剥片を素材に入念に両面加工が施こされる。6面に一部第1次剥離面を残し平坦となる。基部は，平らである。

Ⅲ 石　　槍（第11図21，22，第13図30，31）（図版8A）

比較的大型の尖頭器類である。

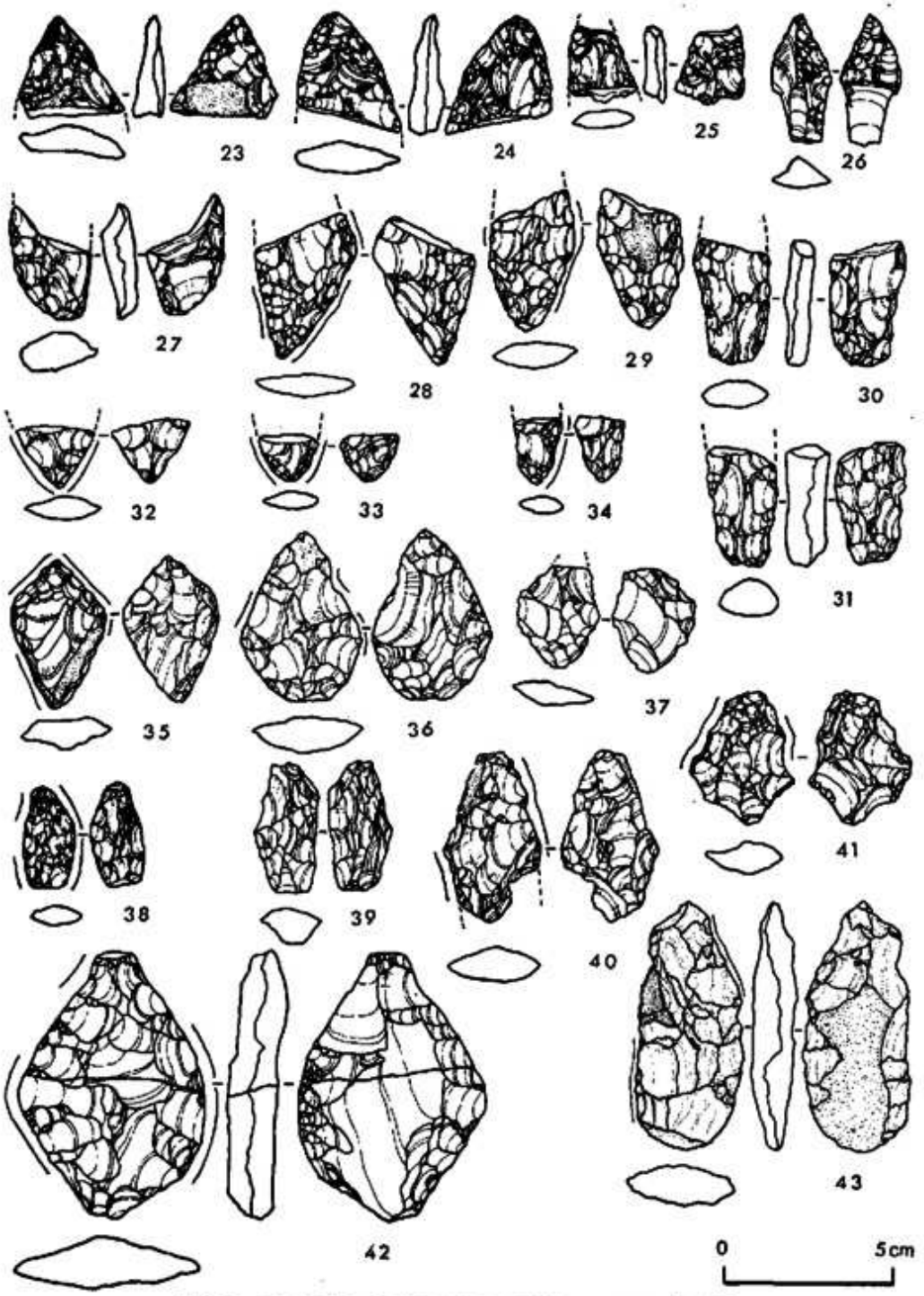
完形の物は，1点より得られていない。(22)

22は，全長88mm，最大幅23mm，重量22gで，入念に両面加工がなされている。形状は，柳葉形となる。

21は，両面加工が施こされており，比較的薄手である。30，31は，柄部の破片で30は薄手，31は厚手である。

Ⅳ 尖頭器破片（第11図17～19，第12図23～29，32～34）（図版8A）

17～19，23，24は，いずれも入念に両面加工がなされている。形状より推定して石鋸先きと称される小型の尖頭器の尖頭部と考えられる。25は，小型の尖頭器の胴部，27～29は，いずれも入念に



第12図　石器実測図（尖頭器破損品・両面加工のナイフ状石器）

両面加工がなされている。形状より，小型の尖頭器，あるいは石槍の柄部と思われ，32～34は，小型尖頭器の基部と考えられる。

Ⅴ　両面加工ナイフ状石器（第12図35，36，38，39，41～43）（図版８Ｂ）

ほとんどの物が両面，半両面加工である。側縁部が刃部であり，「削ぐ，切る」等の目的を有する石器である。

左右は，非対称形であり，断面は扁平である。つまみに類する物は全く認められない。

35，36は，入念に両面加工がなされており尖頭部が作り出されている。35は，ａ面に素材面と第１次剥離面を若干残し，尖頭部に集中的に加工がなされている。ｂ面は平坦である。

38，39は，入念に両面加工が施こされ比較的小型で尖頭器状を呈する。左右は，非対称形である。39は，比較的厚味がある。

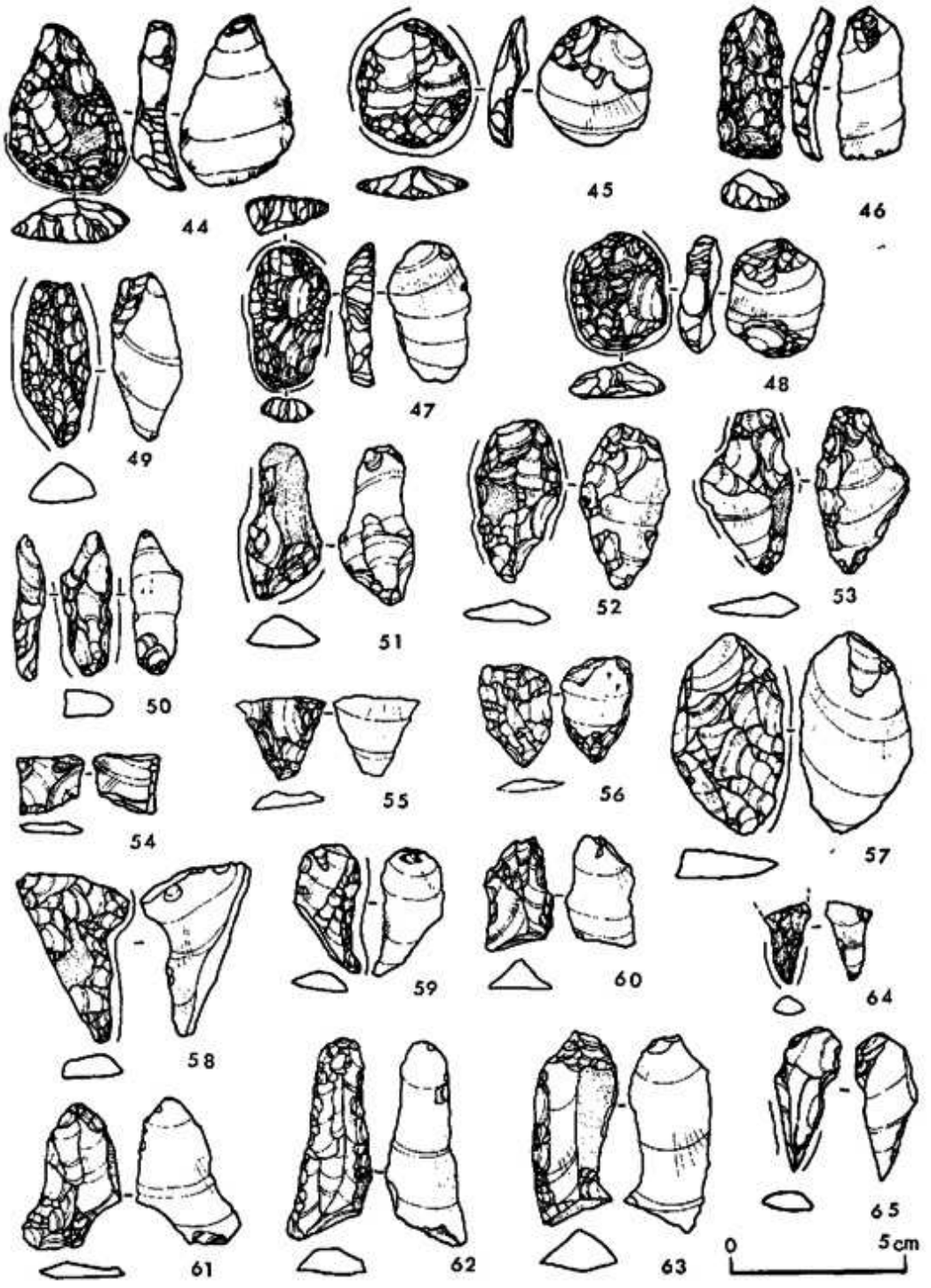
41は，入念に両面加工が施こされａ面上左右両側縁に細かい加工がある。左右は非対称形となる。

42は，厚手幅広の大型剥片を素材に両面加工を入念にほどこされている。ｂ面中央に第１次剥離面を残す。つまみに類する物はみられないが柄部に近い形状の加工がなされている。左右両側縁に細かい加工がみられる。硬質頁岩製である。

43は，半両面加工で，両面に若干の素材面を残し，ａ面上部に細かい加工が集中している。左右は非対称形で断面は扁平である。

Ⅵ　両面加工石器破片（第12図37，40）（図版８Ｂ）

37は，先端部を欠損している。薄手である。40は，基部が欠損している。厚手である。伴に入念に両面加工が施こされている。



第13図　石器実測図（掻器・石錐・削器）

Ⅶ 掻　　器（第13図44～48）（図版８Ｂ）

比較的厚手の大型剥片を素材に，一端に背の高い面をもつ様加工がなされた石器である。一般的にいう「エンド・スクレーパー，ラウンド・スクレパー」の形態に類する。

44，45は，下部に背の高い面をもつ様加工が施こされ，周囲にも同様の加工がなされている。44のｂ面バルブは人為的に擦ってあり，磨滅している。ｄ面全面にわたって規則性のない乱雑な擦痕が多数観察される。

46は，幅広の剥片を素材として，下部を中心に背の高い面をもつ加工が施こされている。また周囲にも同様の加工がなされる。ｂ面には，散発的に乱雑な擦痕が見い出される。

47は，縦長剥片を素材に，特に長軸両端に入念な背の高い面をもつ加工が施こされる。ａ面左右両側縁にも同様の加工が施こされる。ｂ面のバルブ面は欠損している。

48は，円形の厚手剥片を素材に，エッヂにそって全周に背の高い面をもつ様加工が施こされている。

Ⅷ 削　　器（第13図49～63，第14図66，75～80，82～85）（図版８Ｂ，図版９Ａ）

ほとんどの物が，比較的縦長を呈する剥片を素材に，剥片の左右両側縁，一側縁のエッヂに加工を加え，この部分を刃部として「削る，切る等」の目的を有したと考えられる石器群である。

つまみに類するものは，検出されてはいない。一部を除いてｂ面には，第１次剥離面を残すだけでなんら加工が施こされていない。

剥片のどの部分に加工がなされているかによって３類に分類し，全く趣を違え礫核を素材とした，特異な形態を有する石器を加えた。

Ⅷ－ａ類（51～54，56，77，80）

左右両側縁のエッヂに加工を施こし，ｂ面にも若干の加工痕がみられる物である。

Ⅷ－ｂ類（49，50，55，57，58，60，62，84）

左右両側縁のエッヂに加工が施こされる。エッヂだけではなくａ面全面に加工の痕跡を有している物もある。ｂ面は，第１次剥離面がそのまま残され一切の加工痕は認められない。

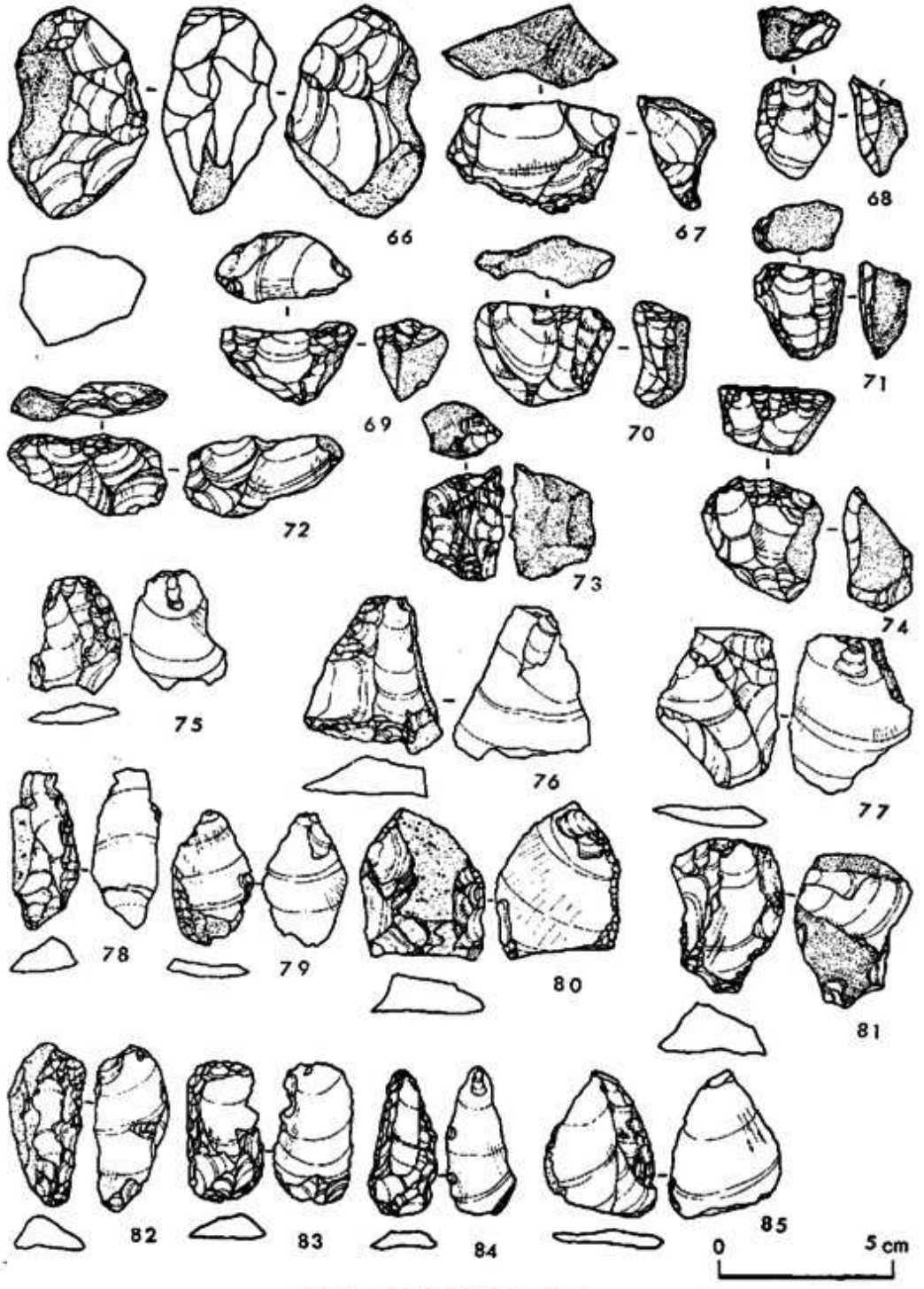
49は，縦長で厚手の剥片を素材に，左右両側縁にそって背の高い面をもつ様加工が施こされる。ｂ面バルブ面は欠損しており，ｂ面全面にわたって乱雑な擦痕がみられる。

50は，比較的厚手の縦長剥片を素材にａ面左右両側縁に加工が施こされる。右上方よりグレーバーフェシット様の剥離がみられる。しかし，彫器とは考えられずなんらかの理由でこの様な形状となった物で意図的に作られた物ではない。

Ⅷ－ｃ類（59，61，63，75，78，79，82，83，85）

剥片の一側縁のエッヂに加工が施こされる物である。

刃部がわん曲して抉入の状態で刃部が加工される物と，直線的な刃部をもつ物がある。



第14図　石器実測図（石核・削器）

Ⅷ－d類（66）

礫核から作られた削器である。手で掴れる程の大きさの円礫の一端を左右交互に打ち欠き，直線的な刃を作り出している。

刃部の断面は，くさび形を呈し，背の部分には礫の自然面を残している。

この種の石器は，「トコロ6類土器」に伴う石器群中に特徴的にみられ，「トコロ貝塚」「上富美遺跡」等にて同種の物が出土している。

Ⅸ　石　　錐（第13図64，65）（図版8B）

柄部を有している。

縦長剥片を素材に加工を加え，下部に刃部を作り出す。

64は，尖頭部に細かい入念な加工が施こされている。柄部は欠損している。

65は，剥片を縦に折り取って整形している。尖頭部に使用によると思われる細かい剥離が認められる。

Ⅹ　石　　核（第14図67～74，81）（図版9A）

粗製の石核である。

本遺跡では，縦長を呈する小剥片が多量に出土している。これらは規則性もって剥離された痕跡を有している。石核の存在を考え合わせると先土器時代に盛行した「石刃技法」に類似した技法の存在が考えられよう。

石核のほとんどの物は，打面を剥離したりせず，礫核の自然面をそのまま打面としている。

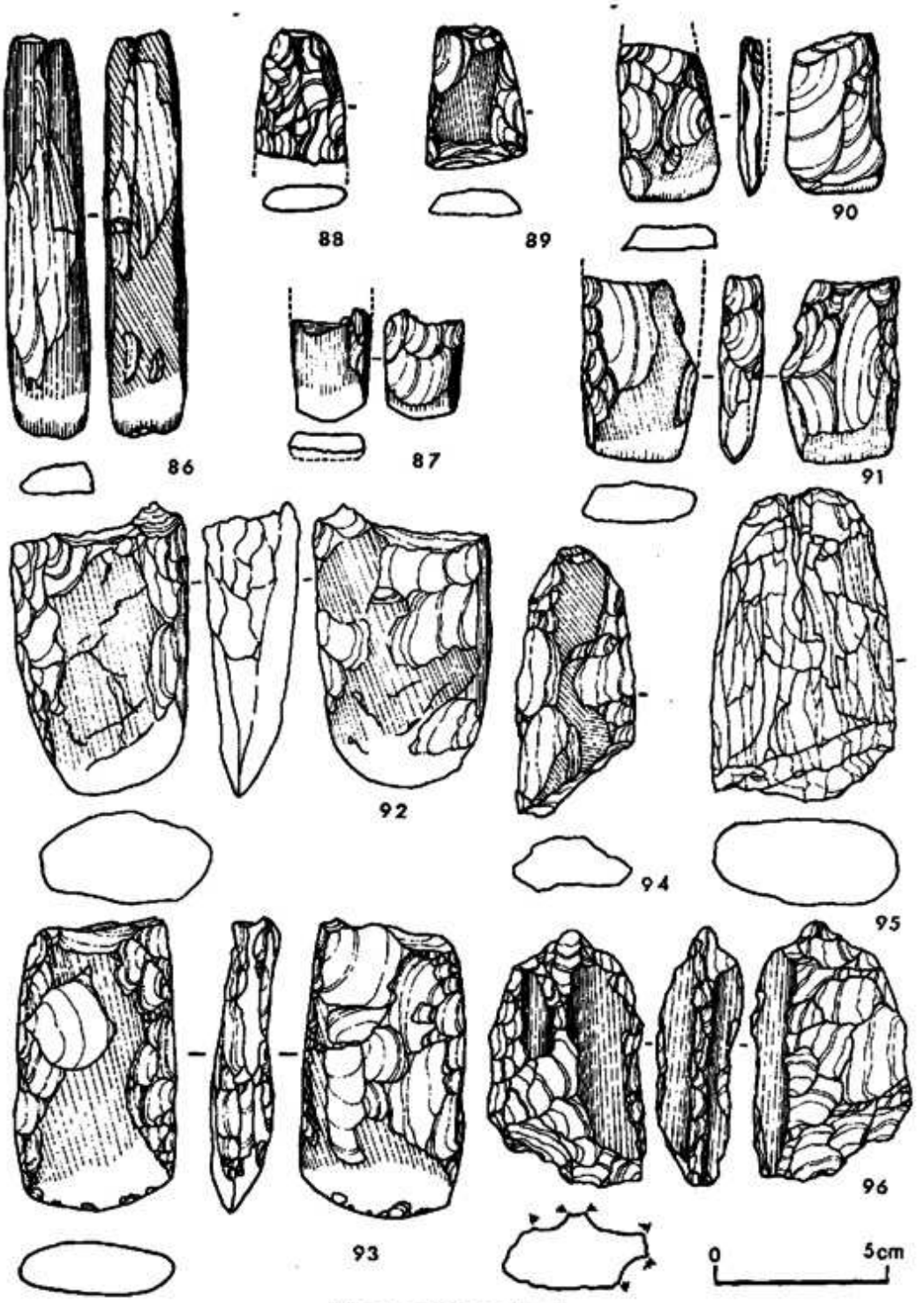
打面と剥離面の角度は，全て50°内外である。

67は，上縁に打点を有し，幅広の剥片を取っている。68，70，71，74は，上縁に打点を有し縦長剥片を取っている。

72は，上下両方向，b面から縦長剥片を剥離している。

73は，全周に打点を有し，小型の縦長剥片を取っている。69は，打撃面を剥離している。この面を打点として幅広剥片が剥離されている。

81は，b面左横よりからも一撃を加え剥片を取っている。



第15図　石器実測図（石斧）

Ⅺ　石斧（第15図86～96，第16図97～99）（図版９Ｂ，図版10Ａ）

全て磨製である，製作技法として素材となる石塊を石斧状に荒割し，さらに全面を細かく敲打し，丸味を帯びる様角を取る。この後に全面に研磨を加え完成するといった製作過程が考えられる。

形状，大きさ，製作技法の特異な物と５類に細分した。

Ⅺ－ａ類（86, 87）

狭長で刃部の幅が狭い。

86は，局部的に素材面を残し，入念に全面を研磨している。長さの割合に幅は狭く，両刃である。整形痕は，長軸方向と右下りである。いわゆる「丸のみ形石器」に近い形を呈する。刃部に抉入はないのみ形石器である。

87は，のみ形石器の刃部破片である。

Ⅺ－ｂ類（88～91）

全く完形の資料は得られなかった，小型の石斧である。のみ形石器より幅広で厚く，大型となる。

88, 89は，頭部破片であり局部的に右下りの整形痕がみられる。

90, 91は，刃部破片であり刃先きより上に向けて使用痕がみられる。

Ⅺ－ｃ類（92, 93, 95）

完形品は得られていない，中型の石斧である。

92は，局部的に素材面を残し研磨している。刃先きは，丸味を帯び片刃である。

93は，大きく素材面を残し，背面に至っては刃部のみ入念に研磨している。刃角は，若干丸味を帯び，ｂ面は平担となり片刃である。

95は，全面を石斧状に敲打し整形した石斧の未成品である。

Ⅺ－ｄ類（97～99）

完形品は，得られていない。大型の石斧でいずれも刃部を欠損している。

97は，全面を長軸方向に向け研磨している。断面は楕円形を呈する。

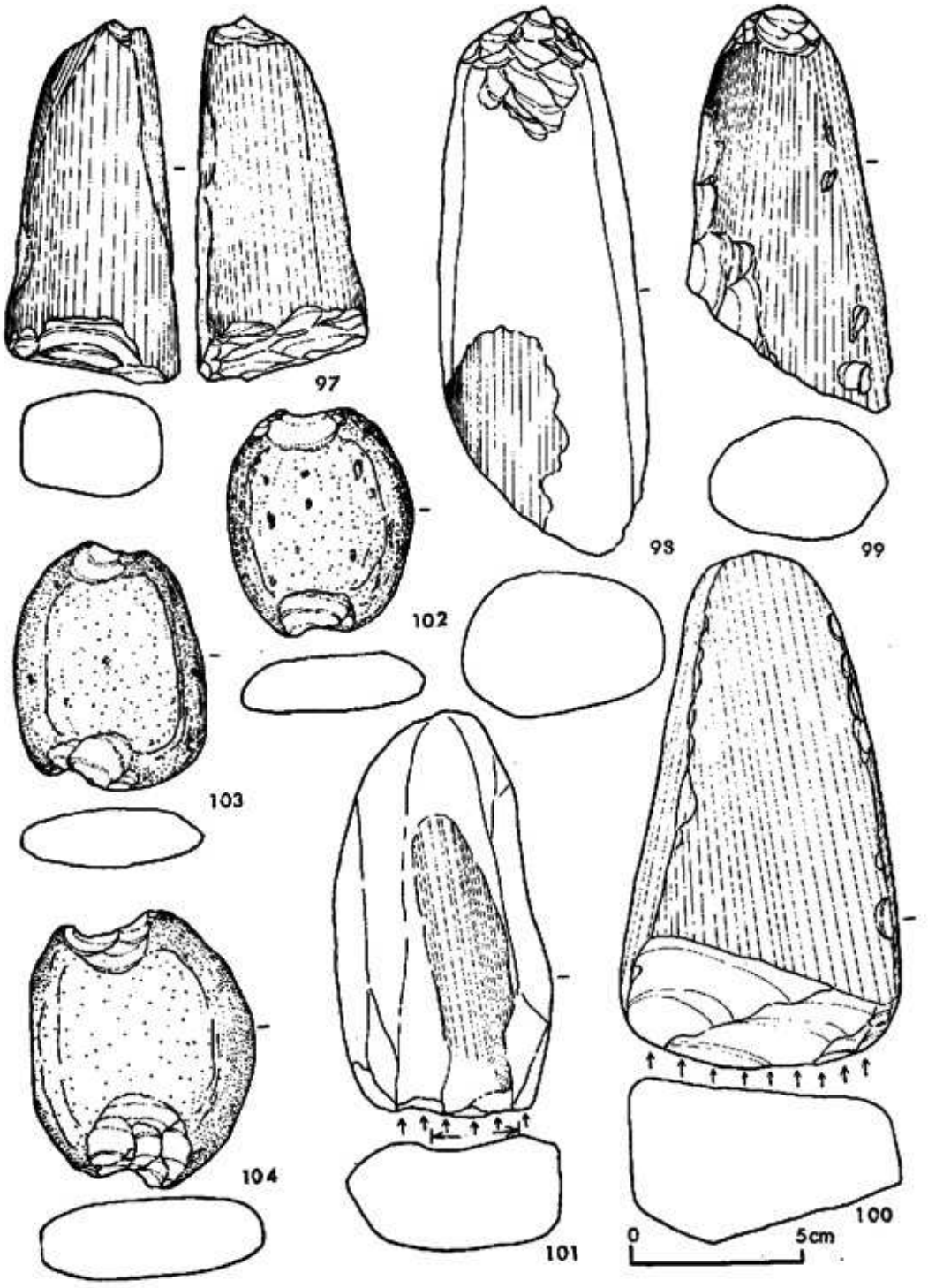
98，99は，全面に細かく敲打整形した痕跡を有し，一部に研磨がなされている。

断面はほぼ円形に近い，乳棒状石斧の可能性が考えられる。

Ⅺ－ｅ類（96）

擦切手法がみられる，石斧の未成品である。

素材の石塊を荒割りし，ａ面右側縁，ｂ面左側縁より「石のこ」によりｕ字状に研磨し折り取った痕跡を有している。ａ面中央部にも長軸方向に向けｕ字状の「石のこ」による研磨の痕が残っている。石材は，硅化木である。



第16図　石器実測図（石斧，石錘，たたき石，擦り石）

XI　石錘（第16図102～104）（図版10A）

3点出土している。この石器は，前記した第Ⅱ群土器に伴った可能性は少ない。むしろ貝殻文を有する平底土器群＝第Ⅰ群土器に伴った可能性が強い。

いずれも楕円形で扁平な河原石を素材にしている。長軸方向の両端に数度の打ち欠きを行い，縄をかける抉りを作り出している。

重量は，93g～150gである。

XII　砥石（第17図105～109）（図版10B）

すべて砂岩質の石が使用されている。

図中に矢印を記し，研磨された方向を示めした。

幾面かにわたり使用した物，一面しか使用されなかった物がある。

また研磨された面は，ほとんどの物が平坦になるが，みぞ状に数条の研磨の痕が残されている物(105)もみられる。

砥ぐあるいは研磨する方向に直交する面は，中央部にてくぼみを有する形となるのが一般的である。

XIV　たたき石（第16図100,104，第18図110,111）（図版10A）

下部に敲打による痕跡を有する物である。

100は，全面にわたり入念に研磨されており，主として擦り石，砥石として使用されていた可能性が強い。下部に敲打の跡がみられる。

114は，下部に敲打の痕跡があり，表面中央下部にu字状にくぼんだ研磨の痕を残している。

110は，全面にわたり長軸方向に向けての荒い研磨の痕を残す。敲打面は，一部表皮が剝脱する程使用されている。

111は，敲打面がすえ広がりとなっており，くり返しの敲打の為，敲打面は，ボロボロの状態を呈している。

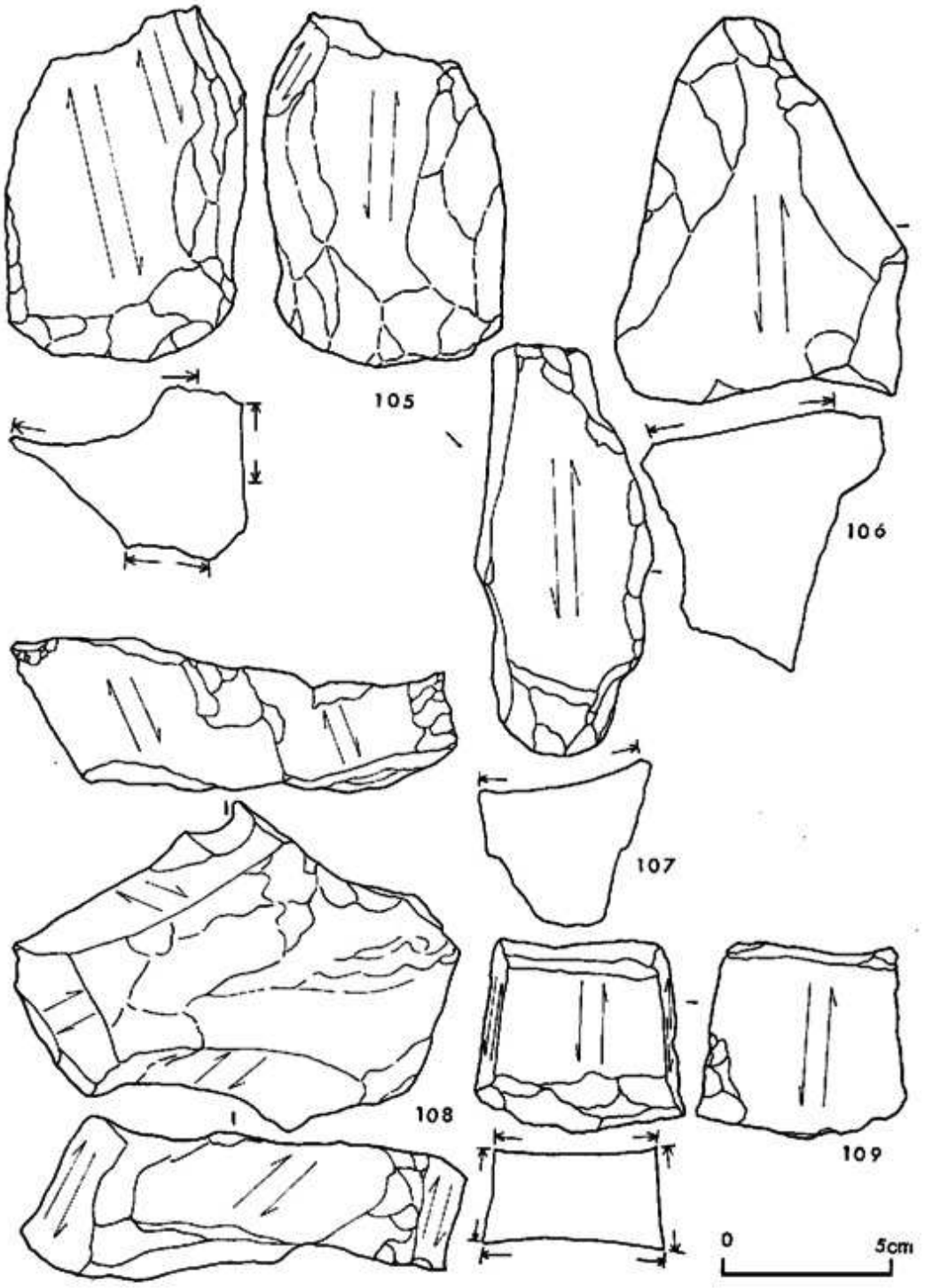
XV　くぼみ石（第18図112,114,115）（図版10B）

細かい敲打のくり返しにより，石の表面にくぼみが残される石器である。

112は，a面に1個

114は，a，b両面に1個ずつ

115は，a，b両面に2個ずつのくぼみが残されている。



第17図 石 器 実 測 図（砥石）

XVI　台石（第18図116）

大型の扁平な河原石の一面に細い敲打のくり返しによって生じた表皮の剝脱がみられる資料である。XIV類とした，たたき石との組み合せにて使用されたと考えられる。

XVII　擦り石（第16図100，第18図113）（図版10A，B）

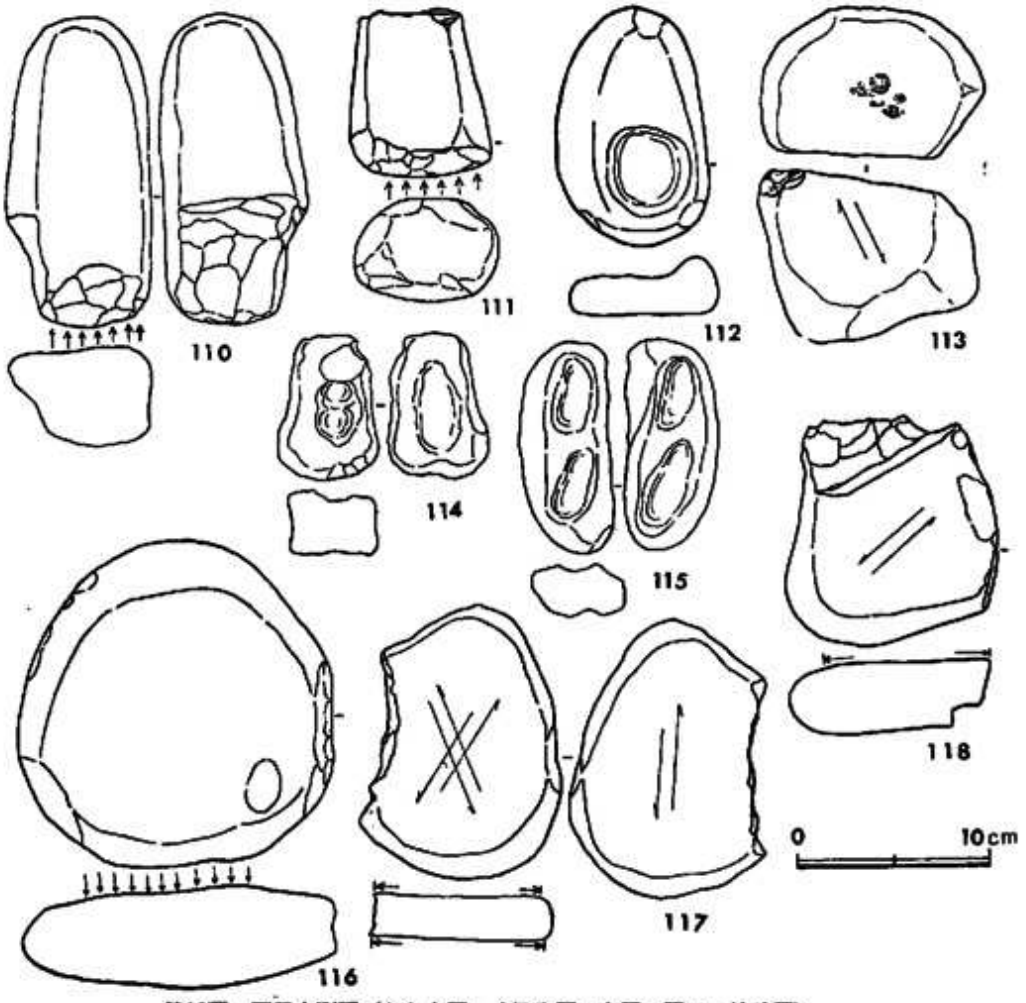
手で握られる程度の河原石の一面が平坦になり，この面全面にわたり研磨した痕跡を有する石器である。XVIII類とした石皿との組み合わせにて使用されたものであろう。

XVIII　石皿（第18図，117，118）

大型の扁平な河原石の一面および両面にわたって擦痕がある資料である。

117は，a面に交差する二方向の擦痕があり，b面には一方向の擦痕がある。

118は，a面にのみ一方向の擦痕が認められる。



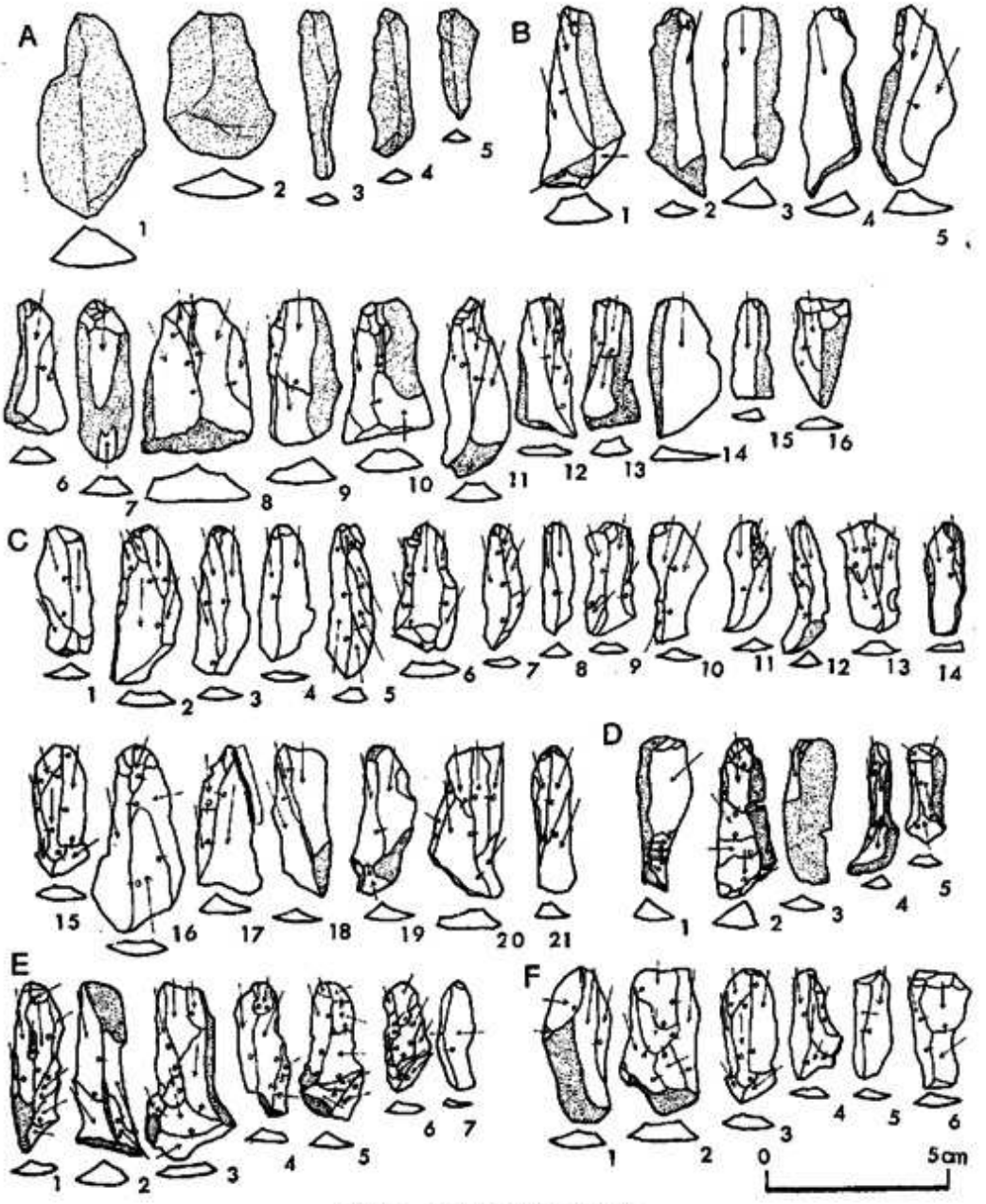
第18図　石器実測図（たたき石，くぼみ石，台石，石皿，擦り石）

剝　片　類（第19図）

本遺跡に於いては，1万余点に及ぶ多量の黒曜石の剝片が得られている。

形状，大きさ等は，多種多様である。

その中で，縦長を呈する剝片はその多くが全長30mm前後，最大幅10mm～20mm，最大幅２mm～10mmの数置中に含まれ，形状もある程度定形化しており，一様に規則的に剝離されたかの様な様相を示めしている。



第19図　縦長剝片実測図

本遺跡では，これらの剥片と密接な関連を有したと考えられる粗製の石核が十数点出土している。

「トコロ6類土器」に伴う石器群中に粗製とはいえ石核が存在し，これより連続的に剥離された定形化した剥片が多量に見られる現象は，古くより指摘されていた。(加藤　1960)

「トコロ貝塚」の調査においても同様の事が指摘されている。大井晴夫は，「トコロ6類土器」の石器群中にみられる石核，縦長を呈する剥片は，先土器時代に盛行した「石刃技法」と同趣の手法にて得られたとしている。

しかし「トコロ6類土器」に伴う石器群の中では，一部分にしかすぎずこれによって得られた縦長剥片を素材に作られた石器は，少なく，他の多くはそれを素材としていない点より，「石刃石器群」とはされないと考えている（大井　1965)。

本遺跡での石器群の様相についても，同様の事がいえよう。

しかし，石核の存在，縦長を呈する石刃様剥片は，たしかに「石刃技法」を想定させるがその根拠は，今もって明確にされてはいない。

先土器時代研究に於いて，「石刃技法」によって結果として得られた「石刃」に関する規定は，一程度行われている様であるが，「石刃技法」に関連しては，あいまいな点が若干残されている様である。

先土器時代研究に於いて，その石器製作の過程を考える上で，個々の石器の面に残された剥離面の相互関係の理解より，石刃核から石刃を剥離する過程の復元がなされた例がある（松沢　1960, 1973)。

本遺跡にて得られた剥片類がはたして「石刃技法」にて得られたかどうか，特に一定の規則性が見い出される縦長の剥片を摘出してその剥離過程を考えて行く。

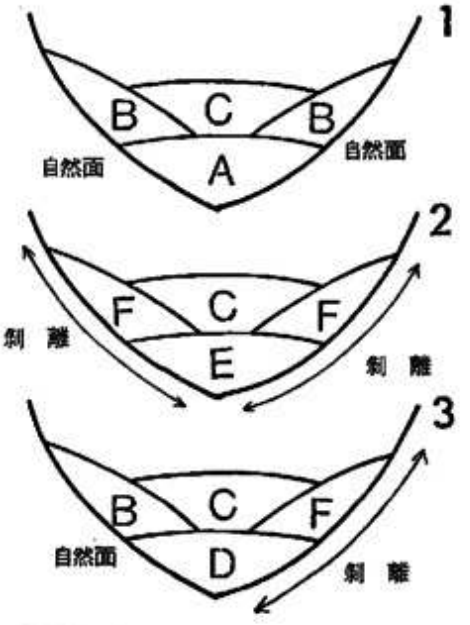
剥片類が連続的に，同一石核より剥離されたものかどうか知るには，剥片の中より接合資料を求めその剥離過程を考える方法が最良の方法としてあげられる。しかし本遺跡にて得られた剥片は，膨大な数でありその中より接合資料を得る事は不可能に近い。

結局，剥片に残されている剥離面の方向，相互の切り会い関係の分類に従って剥片の細分を行い，個々の剥片の剥離前の状態，位置を考え剥離過程の復元を考えた。

分類の規準は，以下の通りである。

(A)　自然面が一面に残されている剥片。

(B)　自然面が主剥離面と同一方向あるいは逆方向の剥離面によって切られる剥片。



第20図　剥離面よりみた剥片の位置概要図

(C) 主剥離面と同一方向，あるいは，逆方向の剥離面が一面に残される剥片。

(D) 自然面が主剥離面と直交する剥離によって切られる剥片。

(E) 主剥離面と直交する剥離面が一面をおおう剥片。

(F) 主剥離面と直交する剥離面が主剥離面と同一方向あるいは逆方向の剥離面によって切られる剥片。

これらの資料をみると，いずれも打点は，非常に小さく，打面については観察できる資料は，全くみられない。

打面調整の有無については不明である。

剥片に残された，剥離面の状態より考えて。

(A) に類別した剥片は，自然のままの石塊に一撃を加え最初に剥離された剥片と考えられる。(B)は，(A)が剥離された隣りを打点として剥離され，(C)は，剥離がかなり進んだ段階で剥離されたものである。(D)は，自然面の一部に主剥離面と直交する方向に自然面を剥離後に剥離された。(F)は，(D)及び(E)以降に剥離された。(E)は，自然面全体を主剥離面と直交する剥離によって剥離した後に剥離された剥片。

といった様に，剥離過程の大まかな順序が考えられる。

また剥片の断面構成を考えると，第20図に示めされる状態が推定された。

前記して来た様に，剥片の剥離過程よりみると，大井が言う様に「石刃技法」と同趣の技術より生産された（大井　1965）と考えてもさしつかえない様に思える。

しかし，細部にわたり検討を加えると，打面調製が顕著でない点，定形化が進んでいない点，粗雑な印象が強い点等が特徴としてあげられる。

こうして量産された剥片類は，その中の一部のものは削器等の石器として再加工され，使用された痕跡がうかがえる。しかし他の大部分の石器類に関しては，これらの剥片類を素材とはしておらず。削器等に加工が施こされた剥片以外の剥片はそのまま廃棄されている。

定形化した剥片類を量産する意図は，全く理解されなかった。

本遺跡より得られた石器群は，その種類・数量ともに本遺跡に於いて生活を営んだ人間集団の生業基盤の一端なりとも明らかにする資料となりうると考えられる。

本遺跡より出土した土器群は，一部の物を除いて大部分は，縄文時代中期後半に位置するであろう「トコロ6類土器」によって代表される土器群である。従って共に出土した石器群もまたそのほとんどの物が「トコロ6類土器」に伴った物と考えられる。

「トコロ6類土器」の分布は，石狩低地帯より道東北部にかけて広く分布しており特に道東北部一帯に密にみられる様である。

この様に分布範囲も広く発見例，発掘例も他時期に比較して多いにもかかわらず，その石器群の様相を明らかにした例はほとんどみられない。

現在，本遺跡にて得られている石器群との比較考察を行うう えに対称とされるだけ，豊富でしか

も伴出関係が明らかにされているのは「朝日トコロ貝塚」よりない。

「トコロ貝塚」の場合は，海岸地域に形成された遺跡であり，内陸部ともいえる地域に形成された本遺跡とではその石器組成にも，地域による差，あるいは生業基盤による差が当然存在すると考えられる。

より明確に，石器組成の差を摘出する為に石器組成比較グラフを作成した。(第21図)（石器組成比較グラフの作成は，「朝日トコロ貝塚」の調査報告にて石器組成の考察に使用されたグラフと同一の方法をとった。石器の分類に関しては，本遺跡にて得られた石器群の分類規準に順じて行った。）

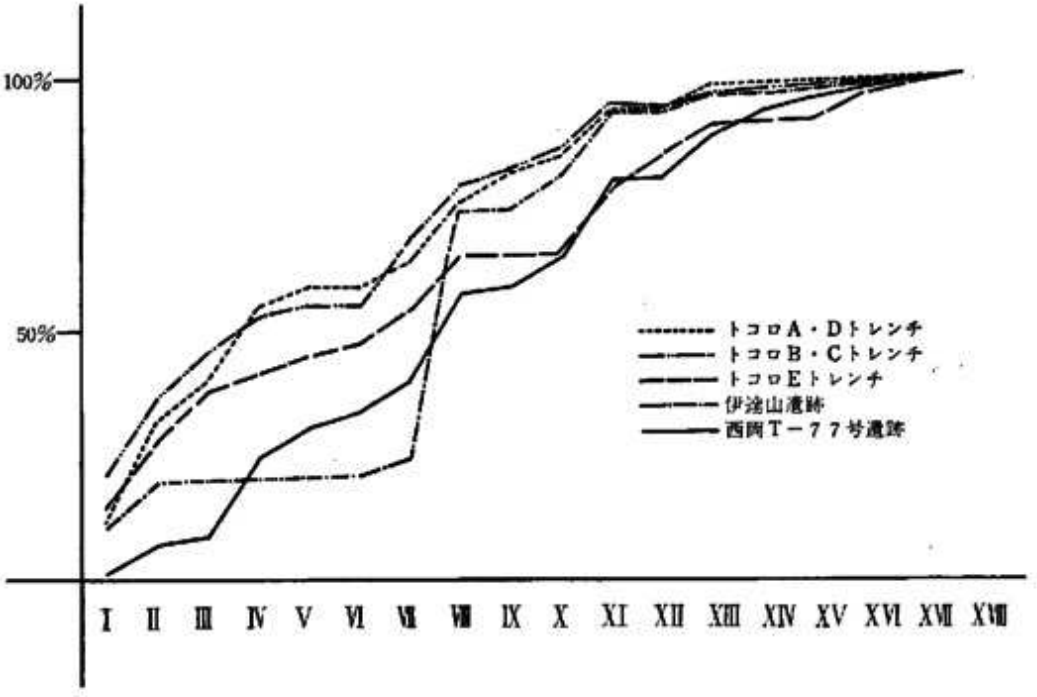
本遺跡との比較対称の遺跡は，「トコロ貝塚A-Dトレンチ・B-Cトレンチ・Eトレンチ」と「トコロ6類土器」ときわめて接近した時期の所産と考えられる「伊達山遺跡」である。円筒式土器系の遺跡の資料も付け加えたかったのであるが，まとまった資料ははとんど無く，不本意ながら加えなかった。

グラフによって見ると，「トコロ貝塚A-Dトレンチ・B-Cトレンチ」は，非常に似た石器組成を示めしている。

「Eトレンチ」の場合は，Ⅷ類（削器）・Ⅹ類（石核）が若干少なく，他トレンチと差のあるグラフとなっている。しかし石器組成全体から見ると他トレンチと基本的には共通している。

本遺跡より得られた石器群は，その種類に於いては，「トコロ貝塚各トレンチ」出土の石器類とほぼ同類の物が得られている。

しかしグラフに示めされる様に，個々に類別した石器の全石器総数よりのパーセンテージは，そ



第21図 石器組成比較グラフ

の差位が明確に示される。

まず，Ⅰ類～Ⅳ類に分類した尖頭器に類する石器の示めるパーセンテージは，「トコロ貝塚」の場合各トレンチ共に全石器総数の50%を示めているのに対して，本遺跡の場合には25%弱と「トコロ貝塚各トレンチ」に比較して非常に少なくなっている。

Ⅴ類～Ⅵ類に分類した「両面加工のナイフ状石器」は，本遺跡では全石器総数の15%にあたる。30個程の出土があるが「トコロ貝塚各トレンチ」では非常に少なくまれにしか得られていない。

また「トコロ貝塚」においては，縦長剥片を素材に簡単な加工を施こした「つまみを有するナイフ状石器（石匙類）」が出土しているが，本遺跡ではそれに類する物は一切出土していない。

擦り石，石皿の類は，本遺跡では若干ながら出土している。「トコロ貝塚」には，全く出土していないらしい。

こうした石器組成の差は，海岸地帯に形成された遺跡と内陸地帯に形成された遺跡といった地域差，生業基盤の差を表わす物と考えられる。

この場合単純に思考すると，「トコロ貝塚」は，漁労が主体をなし，本遺跡は，その立地より考えて狩猟，採集活動が主体をなしたであろう。「トコロ貝塚」の場合遺跡を形成した大量のカキ殻，出土した獣骨類の動物相が鹿等の陸獣骨より圧倒的に多く海獣骨が出土しているという。これらの点よりみても，漁労活動が生業の基盤であったといえよう。

次に「トコロ6類土器」がその発生になんらかの形で関与したといわれている「余市式土器」の最も古いタイプの土器（伊達山式土器）を出土する「伊達山遺跡」（岩崎・三室・室田　1970）の石器群との比較を試た。

「本遺跡」「トコロ貝塚各トンンチ」での石器組成中，全石器総数よりみてⅠ類とした石鏃の出土数が異様に少ないのであるが，「伊達山遺跡」では比較的多く出土している。

Ⅱ類とした小型の尖頭器も，「本遺跡」「トコロ貝塚各トレンチ」共に若干の差こそあれ多く出土しているが，「伊達山遺跡」でも同様に多く出土している。しかしⅢ類とした大型の尖頭器，いわゆる石槍と考えられる資料は全く見られない。

Ⅴ類，Ⅵ類に分類した両面加工のナイフ状石器は，「トコロ貝塚」と同様に全く出土していない様である。

グラフ全体を見ると，上記の点を除いた「伊達山遺跡」に於ける石器組成は「本遺跡」のそれより「トコロ貝塚A-Dトレンチ・B-Cトレンチ」に於ける石器組成により近い類似性を示している。

「トコロ貝塚」に於ける石器組成と「本遺跡」での石器組成との比較により，「トコロ6類土器」に伴う石器群の特徴は，ほぼ明らかにされる。

一致点を整理し，以下簡単に述べて行く。

(1) 「トコロ貝塚」の調査報告では，尖頭器類に機能すると考えられる石器群はその形状，大きさ等を規準として，小型の物は石鏃，中型の有柄の物を石銛，大型の物を石槍と分類した。本遺跡の尖頭器にする石器は形態的には，「トコロ貝塚」の例と同様に3分類される。

しかし，小型の通常我々が石鏃と称している石器も，銛先き等として使用されなかったという確証はなに一つ得られていない。機能の分化といった事で分類した場合，非常にあいまいな点が出現しよう。

(2) 石鏃と考えられる小型の尖頭器の数が非常に少なく，小型の有柄尖頭器が比較的多く出土するといった特徴がある。

小型の有柄尖頭器の用途としては，骨角製のシャフトに組み込んで銛先として使用する用途がまず考えられる。

いわゆる「石銛」の名称は，「朝日トコロ貝塚」の調査報告にて始めて用いられた。(東大文学部 1963)，「朝日トコロ貝塚」で得られた獣骨の動物相では，鹿等の陸獣骨より大型の海獣骨が非常に多く出土したという結果を得ており充分な裏付けを有すると思われる。類似する小型の有柄尖頭器は，縄文時代前期より続縄文時代にかけて，さらにはオホーツク文化にまでみられる。

続縄文時代の遺跡ではあるが「礼文華遺跡」では，打製の石銛先と骨製のシャフトが組み合わされた状態で発見されている。(渡辺 1973)

本遺跡の場合には，内陸部ともいえる地域に形成され，「トコロ貝塚」では小型の尖頭器が石銛先として機能したとされても，本遺跡に於いても同一の機能をもったとは考えられない。

また仮に季節的に河川に溯上してくる産卵期の大型の魚類を獲ったと考えても，それで全ての生活をまかなったとはいえず小型の有柄尖頭器の多く出土する理由とはされない。

生活の基盤は，当然陸獣を対称とした狩猟であったろうと推測され，小型有柄尖頭器は大型の弓を用いた，投てき用の槍の穂先であったとも考えられよう。

一般的に狩猟を考えると，弓，矢といった飛び道具を使用する事によって，先土器時代等の狩猟に比較して，よりいっそう生産力を増したと考えられるが「トコロ貝塚」「本遺跡」とも石鏃の出土量が非常に少ない点が疑問である。

これは一切弓矢等を使用しなかったとは，考えられず骨角等を素材として使用したため残らなかったと解すべきであろうか。

(3) 粗製とはいえ石核が存在し，先土器時代に盛行した石刃技法に類似した手法で一定の形と大きさをもつ石刃様剥片を多量に生産する。こうして得られた剥片の一部は，さらに簡単な再加工が施こされ削器等の石器として使用される。

剥片と石核の関連より考えるなら，大井のいうように「石刃技法」と同趣の手法によって剥片が生産されたとしてさしつかえない様相を示めしている。(大井 1965)

(4) 石斧に関しても，尖頭器類と同様に形状，大きさ等により大まかに3分類される。

その中でも片刃の物，両刃の物とさらに細分される可能性を有している。

本遺跡では，擦切手法と思われる痕跡を有する石斧の未成品がみられる。石斧製作において擦切手法が盛行するのは，縄文時代早期からである。本資料は，貝殻文を有する平低土器に伴った可能性もある。

また特異な形状を呈する石斧もみられる。いわゆる，のみ形石器（Ⅺ－a類）と称する物である。

類似する資料は，縄文時代前期より縄文時代晩期にかけてみられるようである。

しかし本遺跡に於いて得られた資料は，石材，形態より考えるといわゆる丸のみ形石器との関連に於いて考えなければならない。

丸のみ形石器は，特異な形態を有する事より，古くから多くの注目をあびていた。特に石狩川流域に数々の発見例が集中している。

土器の伴出関係は，今だに明らかにされたとはいえないが，縄文時代中期の所産（本田 1969），余市式土器系の所産（加藤　1963），金属製丸のみを模倣した擦文時代（大塚　1966）の諸説がある。

本遺跡にて得られた資料は，明らかに「トコロ6類土器」に伴った物である。大塚の擦文時代の所産というのは根拠が薄弱であろう。

石器全体を見ると，入念に加工が施こされた尖頭器類，剥片を素材に簡単な加工を施こす削器類が多量にみられる事がまず特徴とされる。

先に比較を試みた「トコロ貝塚各トレンチ」，「伊達山遺跡」，「本遺跡」にみられる石器群は，各遺跡ともそれぞれ地域的な特徴を有しているが，基本的には道東北部における縄文時代全般にわたって存在する根強い伝統を保有しいいる事がうかがえる。

石器の素材については，大部分黒曜石が使われている。

「トコロ貝塚」出土の石器群と比較して，個々の石器は小型である事が特徴である。「伊達山遺跡」の場合にも同様の事が指摘されている。

この事実は，石器の素材である良質な黒曜石の産地から遠く入手が困難であった事を示すのであろうか，特にこの点を裏書きするかの様に大型の石槍，両面加工のナイフ状石器には，頁岩等の黒曜石以外の素材を使用する傾向がみられる。

結　　語

以上，各項目別に述べた如く，西岡 T77 遺跡は，縄文時代早期．縄文時代中期にわたって営まれた遺跡である事が解明された。

しかし残念な事に本遺跡は，前述した如くその確認時のもたつきよりすでに大部分が削平され遺跡としては，その一部分しか記録できなかった。

しかも，開拓時より長期にわたって行われた耕作の為良好な包含層を残しておらず，従って縄文時代中期の土器（トコロ6類土器）を主体にわずかの縄文時代早期の貝殻文平底土器が混在して発見された状態である。

遺物は，非常に多いにもかかわらず，発掘調査に際しては遺構に類する物は何一つ発見されず，遺跡の性格等を考え上において，何らの説明も得られなかった。ローム上面には，数カ所の焼土の集積が認められているが遺跡との関連は残念な事に明確にされてはいない。

出土遺物の主体は，縄文時代中期の土器でかつて北筒式土器と称されていた「朝日トコロ貝塚出土第6類土器」によって代表される土器群である。

「トコロ6類土器」は，特に道東北部を中心に広がりを見せている土器群である。本遺跡出土の土器は，一部を除いてそのほとんどが「トコロ6類土器」であり単純遺跡といっても過言ではない状況にある。札幌近郊の遺跡では，平岸坊主山遺跡，白石神社遺跡においてても「トコロ6類土器」が比較的多く出土しているが，いずれも「円筒上層式系土器」「余市式土器」が伴に出土しており，本遺跡の様に「トコロ6類土器」が単一に出土した例はみられない。

遺構は発見されなかったが，札幌近郊での「トコロ6類土器」の様相は今後の研究の課題となろう。

また「トコロ6類土器」に混入の形で数十片だが，縄文時代早期の貝殻文を有する平底土器の出土があった。

現在まで札幌近郊においては，全くこの類の土器の存在は知られていなかったのであるが，今後近隣の各地域での調査によって，当該時期の概要は明らかにされるであろう。

出土石器は，縦長の剥片が非常に多量に出土し，かつ石器の素材として用いられている事が特徴としてとらえられた。

石器組成全体を見れば，朝日トコロ貝塚等の「トコロ6類土器」に伴う石器組成と非常に近い事が指摘された。しかし，細い点では差位がみられ，海岸地域に形成された遺跡と内陸部に営まれた遺跡といった生業基盤の差として考える事がなされるであろう。

「トコロ6類土器」に伴う石器群の様相は現在まで確実な物は，朝日トコロ貝塚のそれ以外にはほとんど見られなかったのであるが，今回の調査にて本遺跡で得られた石器群はその量，質ともに

トコロ貝塚の石器群との比較に十分たえれる物であり，これらの対比によって「トコロ6類土器」に伴う石器群の様相はほぼ明らかにされたといえよう。

以上，良好な遺跡とは言えないまでも，札幌近郊の先史時代を考える上においていくらかの新事実を提示する事ができたと言えよう。

（羽　賀　憲　二）

引用・参考文献

明石　博志　1965　「暁遺跡」『郷土十勝』5

岩崎　隆人・三宝　俊彦・室田　彰則　1970　『伊達山遺跡』

大井　晴男　1965　「日本の石刃石器群 "Blade Industry" について」『物質文化』5所収

大塚　和義　1966　「石狩・花畔出土の石器」「Field』3所収

大場　利夫　1969　「縄文中期文化—北海道—」『新版考古学講座』3所収

大場　利夫・明石　博志　1968　『平和遺跡』第1集

大場　利夫・明石　博志　1971　『平和遺跡』

大場　利夫・石川　　徹　1961　『浜益遺跡』

大場　利夫・加藤　　正　1960　『女満別遺跡』

大場　利夫・桐井　力蔵　1958　『岩内遺跡』

大場　利夫・C・S・チャード　1962　「北海道先史文化の実年代について」『考古学雑誌』48—1所収

大場　利夫・竹田　輝雄・扇谷　昌康　1962　「白老郡虎杖浜遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』17所収

大場　利夫・棚瀬　善一　1965　『大樹遺跡』

加藤　晋平　1963　「丸のみ形石斧について」『考古学雑誌』48—4所収

加藤　　正　1960　「北筒式土器文化に含む特殊な要素」『先史時代』10所収

菊地　俊彦　1967　「平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3所収

木村　英明　1967　「北海道先土器文化終焉に関する一理解」『古代文化』19—2所収

桑原　　護　1964　「北筒式土器について」『北海道青年人類科学研究会会誌』No.4所収

桑原　　護　1966　「北筒式土器」『考古学雑誌』51—4所収

河野　広道　1961　「帯広市暁台地遺跡調査報告」『アイヌモシリ』5，6合併号所収

河野　広道・沢　　四郎・岡崎　由夫・山口　　敏　1962　『東釧路』

児玉作左衛門・大場　利夫　1955　「網走市大曲洞窟出土の遺物について」『北方文化研究報告』10所収

児玉作左衛門・大場　利夫・武内　叡太　1958　『サイベ沢遺跡』

斉藤　傑他　1968　『嵐山遺跡』

札幌市教育委員会　1973　「白石神社遺跡」『札幌市文化財調査報告書』1

沢　　四郎　1962　「沼尻式土器のまとめ」『釧路市立郷土博物館館報』124～126号所収

沢　　四郎　1964　「北海道テンネル第一地点出土の土器について」『釧路の古代文化』第6集所収

沢　　四郎　1969a「道東における早期縄文土器の編年について」『釧路史学』創刊号所収

沢　　四郎　1969b「釧路川流域の先史時代」『釧路川』所収

沢　　四郎・西　　幸隆　1973　「北海道釧路市沼尻遺跡の出土遺物について」『釧路市立郷土博物館紀要』第2号所収

高橋　正勝　1966　「函館市見晴町遺跡の資料」『北海道青年人類科学研究会会誌』No.8所収

高橋　正勝　1972a「北海道における縄文時代中期終末(1)」『北海道青年人類科学研究会会誌』No.9所収

高橋　正勝　1972b「北海道における縄文時代中期終末(2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』No.10所収

竹田　輝雄　1956　「北海道豊浦町アルトリ遺跡について」『上代文化』26所収

東京大学文学部　1963　『オホーツク海沿岸，知床半島の遺跡』上巻

野村　崇　1967　『夕張川流域の先史遺跡』
野村　崇・本田　栄作他　1969　『空知の文化財』第1集
畑　宏明　1966　「札幌市附近の遺跡―資料篇―Ⅱ，札幌市平岸坊主山遺跡」"Aynu Moshiri" Ⅱ所収
松沢　亜生　1960　「石器研究におけるテクノロジーの一方向」『考古学手帖』12所収
松沢　亜生　1973　「樽岸ブレード，テクニック」『石器時代』10所収
八幡　一郎　1963　「トコロ貝塚貝層出土の土器」『オホーツク海沿岸，知床半島の遺跡』上巻所収
山崎　博信　1966　『智東B地点―図録篇―』
山崎　博信・長谷川　功　1968　『智東B地点―本文篇』
吉崎　昌一　1965　「縄文文化の発展と地域性―北海道―」『日本の考古学』Ⅱ所収
渡辺　誠　1973　『縄文時代の漁業』

石器計測値一覧表

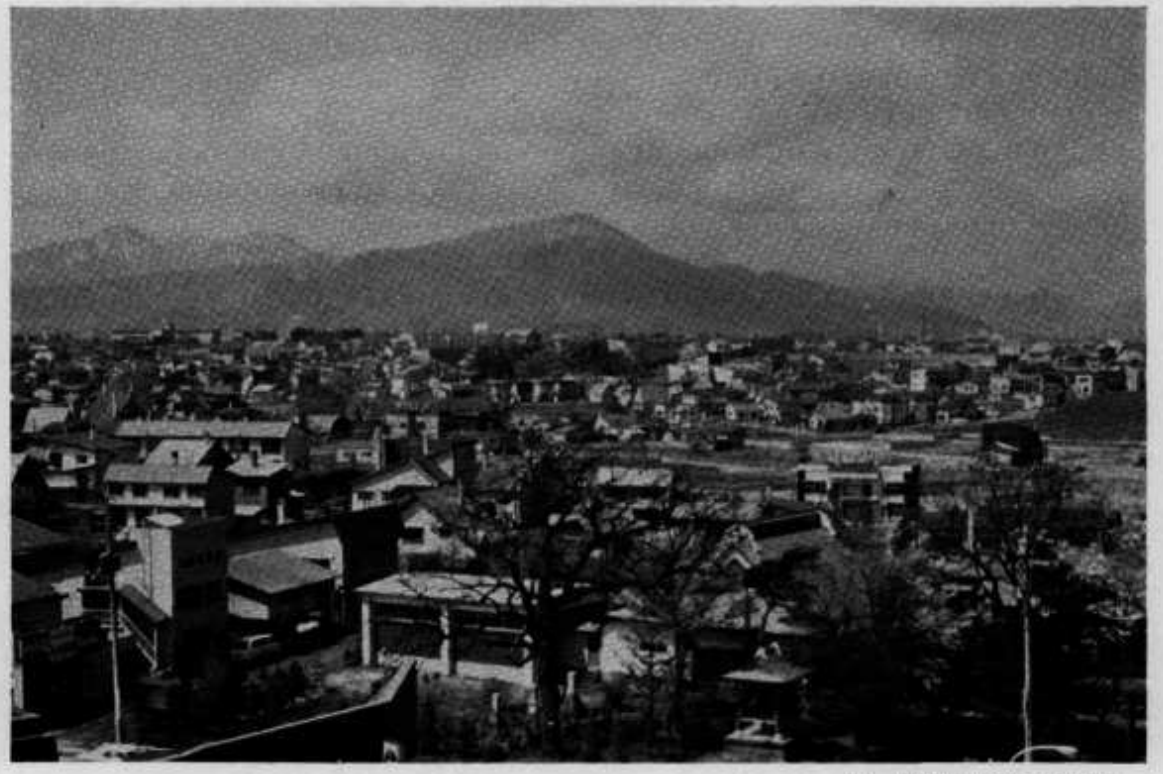
図版番号	出土地区	層序	類別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
11-1			Ⅰ	(22.0)	12.5	4.0	7.0	Obs	尖端部欠損
2	D-7	B	Ⅰ	33.0	16.0	3.5	1.2	Obs	
3	H-8	B	Ⅰ	34.0	15.5	3.5	1.45	Obs	
4	E-7	B	Ⅱ-b	60.0	22.0	9.5	10.25	Obs	
5	D-9	B	Ⅱ-b	60.0	30.5	8.0	7.5	Obs	
6	J-9	Y	Ⅱ-a	34.0	28.0	7.0	5.6	Obs	
7	H-10	B	Ⅱ-c	(44.5)	23.5	7.0	4.7	Obs	尖端部欠損
8	H-8	BR	Ⅱ-a	49.5	22.0	6.5	6.7	Obs	接合資料
9	C-9	Y	Ⅱ-b	45.0	21.5	7.0	4.15	Obs	
10	J-9	Y	Ⅱ-c	53.0	21.0	8.0	6.4	Obs	
11	J-9	Y	Ⅱ-b	51.5	28.5	9.5	9.0	Obs	
12	E-5	B	Ⅱ-b	43.0	26.5	9.5	7.8	Obs	
13	F-11	B	Ⅱ-b	45.5	22.0	8.0	4.35	Obs	
14	D-8	B	Ⅱ-a	39.0	22.0	8.0	4.4	Obs	
15	C-6	B	Ⅱ	(54.0)	31.0	8.0	13.8	Obs	
16	C-6	B	Ⅱ	(41.0)	27.5	6.5	6.5	Obs	
17	F-11	B	Ⅳ	(21.0)	15.0	4.0	0.9	Obs	
18	C-6	B	Ⅳ	(27.5)	11.0	4.0	1.9	Obs	
19			Ⅳ	(27.0)	25.0	7.0	3.9	Obs	
20	C-6	B	Ⅱ	(43.0)	28.0	4.0	4.5	Obs	
21	D-6	B	Ⅲ	(51.0)	25.0	8.5	9.0	Obs	
22	D-6	B	Ⅲ	88.0	23.0	10.0	22.0	Slh	
12-23			Ⅳ	(29.0)	31.0	8.0	4.65	Obs	
24			Ⅳ	(35.0)	31.0	9.0	6.0	Obs	
25			Ⅳ	(22.0)	20.0	5.0	2.45	Obs	
26			Ⅳ	(37.5)	17.0	9.0	3.25	Obs	
27			Ⅳ	(33.0)	22.0	10.5	4.9	Obs	
28	J-9	Y	Ⅳ	(43.0)	29.0	7.0	6.05	Obs	
29	E-7	Y	Ⅳ	(42.0)	23.0	7.5	7.4	Sih	
30	E-8	B	Ⅲ	(36.0)	21.5	8.0	6.1	Rhy	
31	D-8	B	Ⅲ	(35.0)	20.0	11.0	10.25	Che	
32	H-8	B	Ⅳ	(18.0)	22.0	6.0	1.9	Obs	
33	I-9	B	Ⅳ	(13.0)	16.0	5.0	0.9	Obs	
34			Ⅳ	(19.0)	13.5	5.0	1.05	Obs	
35	E-8	B	Ⅴ	43.0	29.5	8.5	7.9	Obs	
36	H-8	BR	Ⅴ	49.0	32.5	10.0	13.25	Obs	
37	J-9	S	Ⅶ	(29.0)	24.0	7.0	4.0	Obs	
38	D-8	B	Ⅴ	30.0	14.0	5.5	2.4	Obs	
39	I-8	B	Ⅴ	38.0	18.0	10.0	6.3	Obs	
40	E-8	B	Ⅵ	(50.0)	28.0	10.5	12.85	Obs	

図版番号	出土地区	層序	類別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
41	C-10	Y	Ⅴ	39.0	28.5	9.5	7.4	Obs	
42	C-8	B	Ⅴ	79.0	53.0	15.0	55.7	Sh	接合資料
43	C-1	B	Ⅴ	27.0	30.5	10.0	26.7	Ss	
13-44	E-5	B	Ⅶ	42.9	33.0	13.0	15.5	Obs	バルブ面を擦ってある。
45	J-9	S	Ⅶ	38.0	32.5	9.0	8.5	Obs	
46	D-6	Y	Ⅶ	44.0	19.0	12.0	7.8	Obs	
47	H-11	B	Ⅶ	41.0	22.5	9.0	7.6	Obs	
48	D-8	B	Ⅶ	34.0	27.5	10.0	9.1	Obs	
49	C-8	B	Ⅶ	49.0	19.5	11.0	9.6	Obs	主剥離面に擦痕がみられる。
50	D-8	B	Ⅶ-b	42.5	15.0	7.5	4.8	Obs	
51	D-8	B	Ⅶ-a	46.5	21.0	8.5	6.7	Obs	焼けている。
52	E-8	B	Ⅶ-a	47.0	25.0	6.0	6.1	Obs	
53	E-8	B	Ⅶ-a	49.0	26.5	6.5	6.7	Obs	
54	D-6	B	Ⅶ-a	17.0	19.5	3.0	1.4	Obs	
55	I-9	B	Ⅶ-b	24.0	26.0	4.3	2.1	Obs	
56	C-7	B	Ⅶ-a	30.0	20.0	3.0	2.0	Obs	
57	C-14	B	Ⅶ-b	59.0	29.0	8.0	14.5	Obs	
58	G-8	B	Ⅶ-b	50.0	32.0	8.0	7.1	Obs	
59	D-7	B	Ⅶ-c	37.0	16.0	5.0	3.4	Obs	
60	D-8	B	Ⅶ-b	32.0	19.0	8.5	4.2	Obs	
61	J-8	B	Ⅶ-c	43.0	25.0	5.9	4.25	Obs	
62	C-9	B	Ⅶ-b	60.0	20.0	11.4	10.4	Obs	
63	I-9	BR	Ⅶ-c	57.0	23.0	11.7	13.3	Obs	
64	I-10	S	Ⅵ	(25.0)	13.5	5.0	0.9	Obs	柄部欠損
65	I-9	B	Ⅸ	43.0	15.0	5.5	3.8	Slh	
14-66	C-8	B	Ⅶ-a	62.0	32.0	28.5	7.74	Ag	
67	D-7	B	Ⅹ	37.0	50.0	23.0	20.1	Obs	
68	C-7	B	Ⅹ	29.0	21.0	16.0	8.2	Obs	
69	J-9	S	Ⅹ	25.0	39.0	22.0	12.0	Obs	
70	C-7	B	Ⅹ	30.0	41.0	15.0	14.0	Obs	
71	E-8	B	Ⅹ	28.5	26.0	14.5	9.2	Obs	
72	I-9	B	Ⅹ	23.0	44.5	10.0	7.7	Obs	
73	H-11	B	Ⅹ	33.0	33.0	18.0	17.5	Obs	
74	J-8	B	Ⅹ	34.0	26.0	6.0	4.1	Obs	
75	D-5	Y	Ⅶ-c	33.0	23.0	16.0	11.8	Obs	
76	J-9	Y	Ⅹ	40.0	45.0	1.19	18.0	Obs	
77	D-8	B	Ⅶ-a	46.0	36.0	8.0	8.8	Obs	
78			Ⅶ-c	46.0	19.0	10.0	7.0	Obs	
79			Ⅶ-c	39.0	23.0	5.0	3.7	Obs	
80	D-6	B	Ⅶ-a	45.0	34.5	11.0	16.0	Obs	

図版番号	出土地区	層序	類別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
81			Ⅹ	46.0	31.0	16.4	20.7	Obs	
82	H-8	B	Ⅶ-c	48.0	20.0	8.0	8.6	Obs	
83			Ⅶ-c	41.0	23.0	7.5	5.6	Obs	
84	J-8	B	Ⅶ-b	42.0	19.0	3.9	3.7	Obs	
85			Ⅶ-c	43.0	31.0	3.7	5.1	Obs	
15-86	D-6	B	Ⅺ-a	117.0	24.0	8.0	50.1	Bls	接合資料
87	D-5	Y	Ⅺ-a	(34.0)	23.0	5.0	6.45	Gres	刃部破片
88			Ⅺ-b	(40.0)	21.0	7.0	11.6	Bls	頭部破片
89			Ⅺ-o	(42.0)	28.5	8.0	12.95	Bls	頭部破片
90	E-8	B	Ⅺ-b	(46.5)	28.0	7.5	13.7	Bls	
91	E-7	B	Ⅺ-b	(55.0)	33.0	12.0	33.6	Bls	
92			Ⅺ-c	(83.0)	50.0	27.0	150.0	Bls	
93	H-8	B	Ⅺ-c	(85.0)	45.0	17.0	110.0	Gres	
94	C-6	B	Ⅺ-c	(80.0)	34.0	15.0	59.5	Ser	
95	D-3	B	Ⅺ-c	(92.0)	52.0	25.0	100.0	Bls	
96	D-8		Ⅺ-c	(75.0)	44.0	23.0	93.5	硅化木	
16-97	I-9	B	Ⅺ-d	(106.5)	50.0	33.0	200.0	Dol	
98	E-8	B	Ⅺ-d	(161.5)	58.3	45.0	600.0	Gres	
99	D-7	B	Ⅺ-d	(117.9)	56.0	34.9	260.0	Gres	
100	E-9	B	Ⅺ	66.0	52.0	16.0	93.3	Ss	擦り石の可能性が大きい。
101			Ⅺ	73.0	54.0	17.0	99.8	An	
102	C-7	B	Ⅺ	81.0	68.0	22.5	150.0	An	
103	H-11	B	Ⅻ	151.0	81.0	52.9	700.0	An	
104	H-9	B	Ⅻ	118.0	61.0	43.0	450.0	Ss	
17-105	I-9		Ⅻ	102.0	68.0	48.8	300.0	Ss	
106	H-9	B	Ⅻ	111.0	91.1	58.0	450.6	Ss	
107	D-8	B	Ⅻ	119.0	50.0	51.4	230.0	Ss	
108	C-6	B	Ⅻ	100.0	130.0	48.0	400.0	Ss	
109	E-8	B	Ⅻ	57.0	53.0	34.2	150.0	Ss	
18-110	E-6	Y	ⅩⅢ	165.0	75.0	52.0	1000.0	An	長軸方向の擦痕がある。
111			ⅩⅢ	90.0	75.0	55.0	550.0	An	
112	E-8	B	ⅩⅣ	127.0	76.0	30.0	460.0	An	
113	D-9	B	ⅩⅢ	75.0	53.0	35.0	160.0	An	
114			ⅩⅣ	138.0	115.0	50.0	1160.0	An	
115	C-9	B	ⅩⅣ	110.0	50.0	28.0	150.0	An	
116	E-7	B	ⅩⅥ	172.0	162.0	53.0	2120.0	An	
117	G-8	B	ⅩⅦ	141.0	94.0	23.0	600.0	An	
118	J-9	S	ⅩⅧ	120.0	105.0	36.0	750.0	An	

略号　層序　S：褐丸層　B：黒色土層　BR：茶褐色土層　Y：漸移層

石質　Obs（Obsidian）：黒曜石　Sh（Hard Shell）：硬質貝岩　Slh（Siliceous Shell）：硅質貝岩　Che（Chert）：硅岩　Rhy（Rhyolite）：流紋岩　Bls（Black Schist）：黒色片岩
Gres（Green Schist）：緑色片岩　Ss（Sand Stone）：砂岩　An（Ande Sito）：安山岩　Dol（Doler）：輝緑岩　Ag（Agate）：メノー　Ser（Serpetine）：蛇紋岩



A　遺跡遠景（東方向より）

B　遺跡遠景（南方向より）

A　発掘風景（昭和47年11月）

B　グリッド配置（南方向より）

A　発掘区遺物出土状態（1）

B　発掘区遺物出土状態（2）

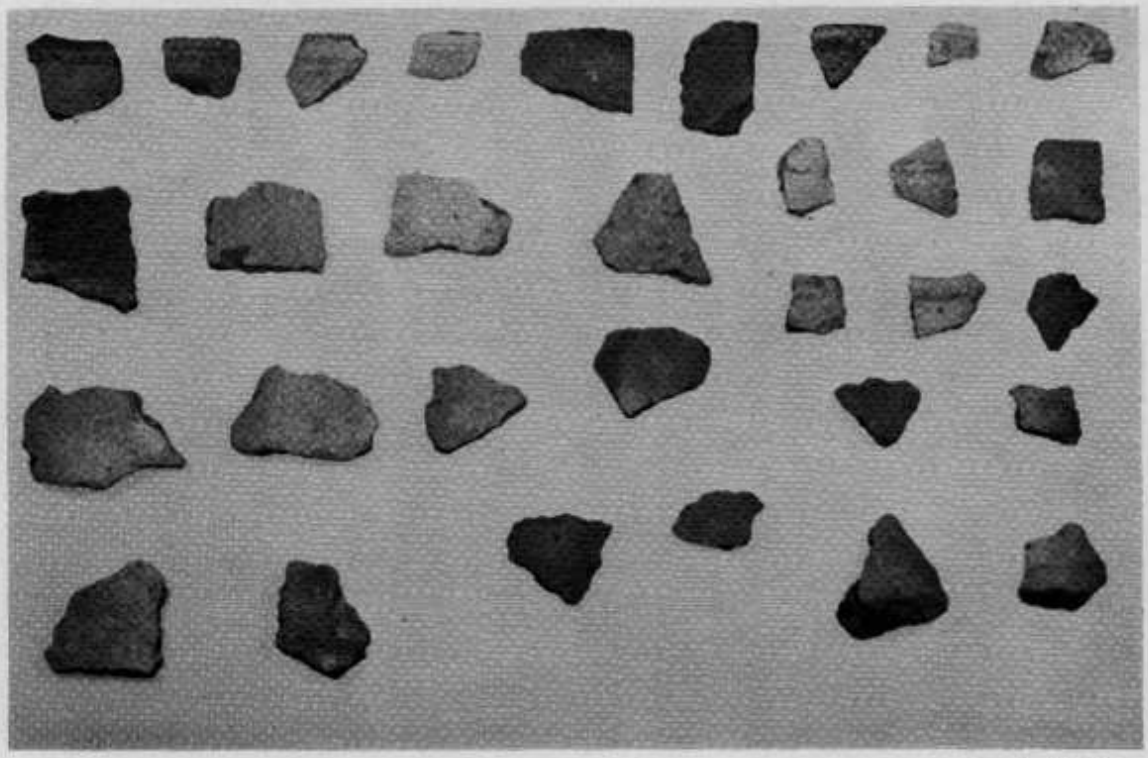
1

2

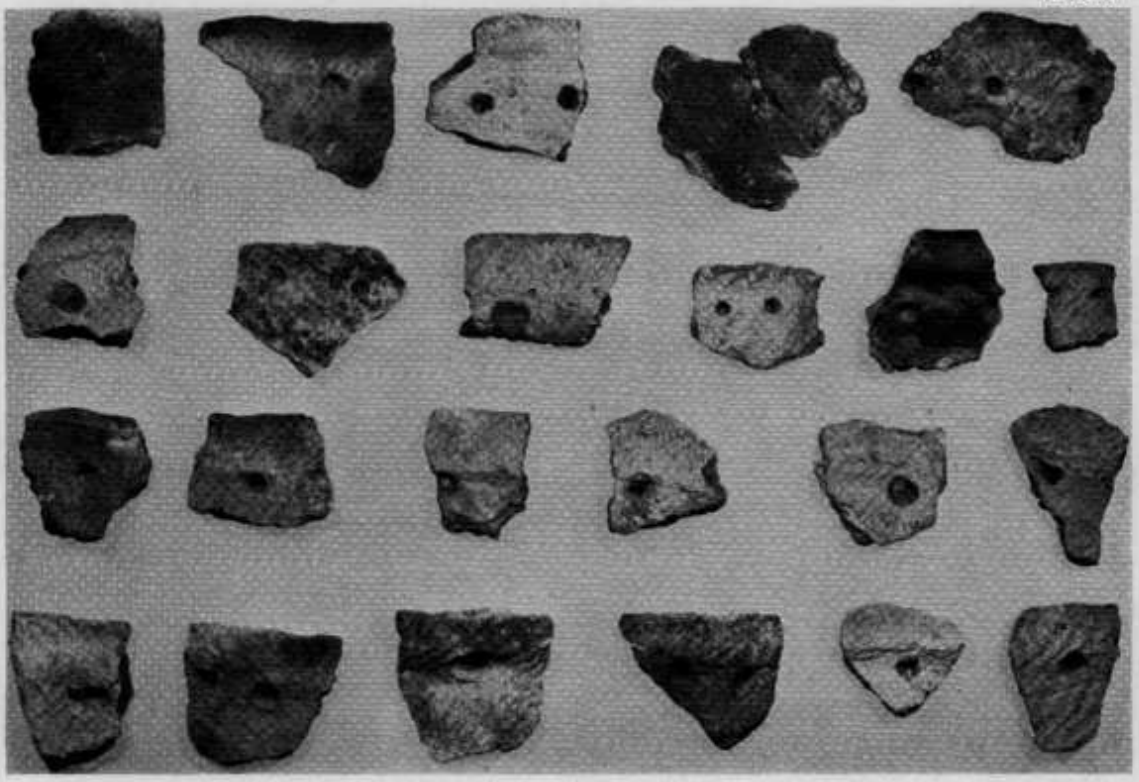
完 形 土 器

図版 4

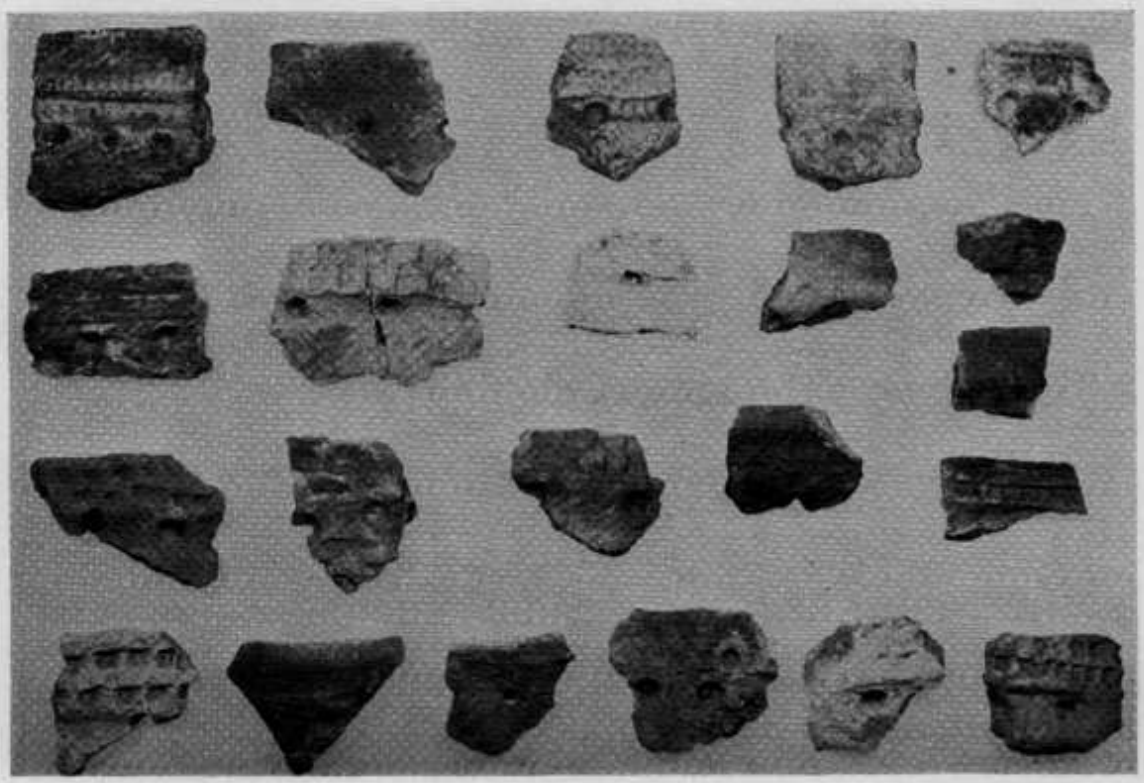
A　I—10区北壁セクション



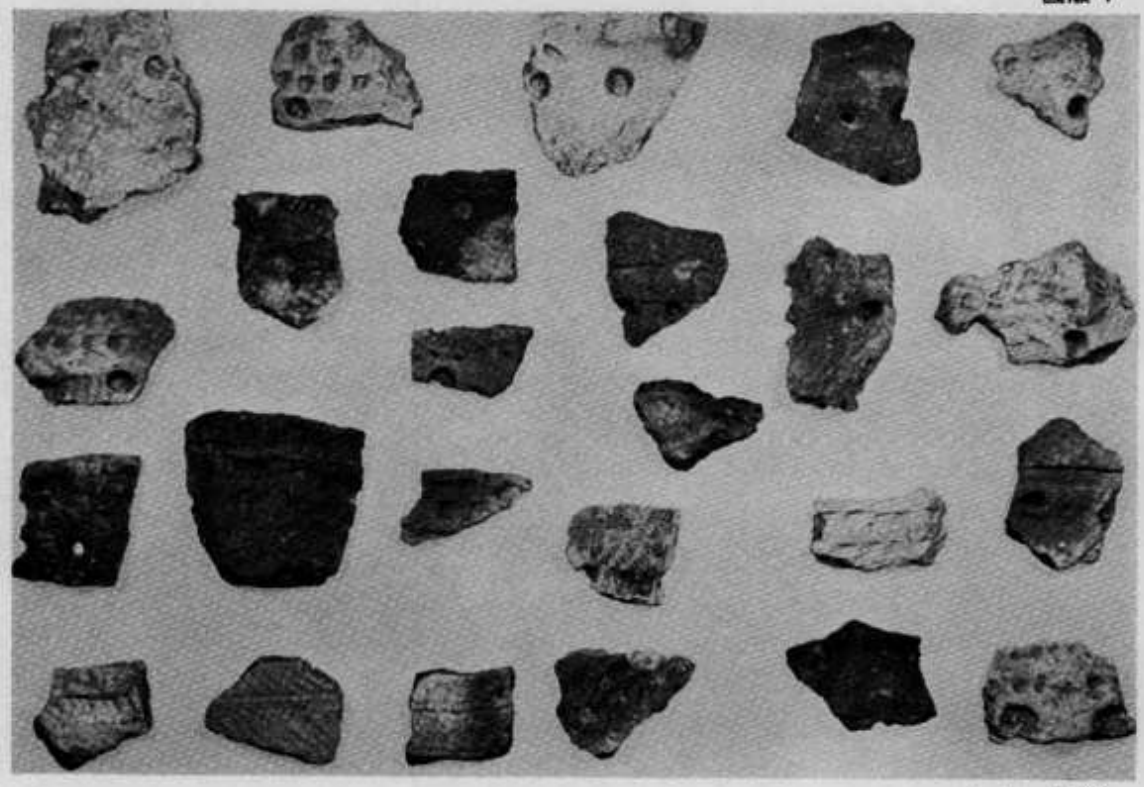
B　土　器 (1)



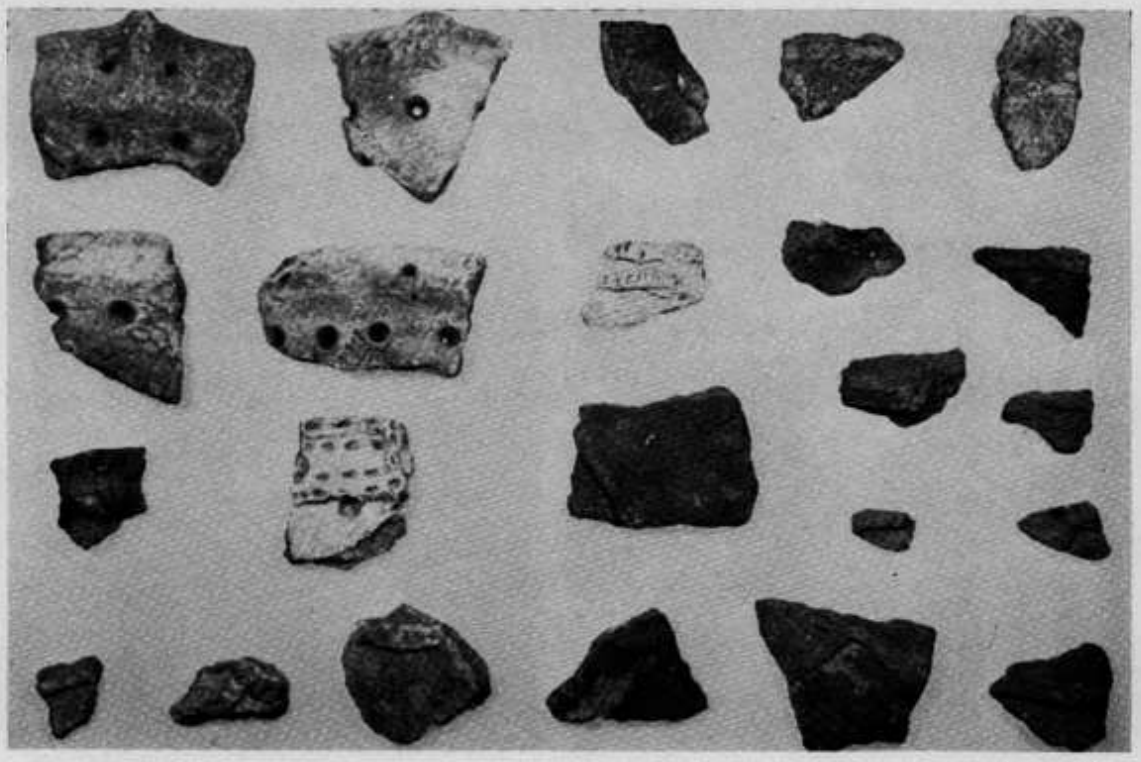
A 土 器 (2)



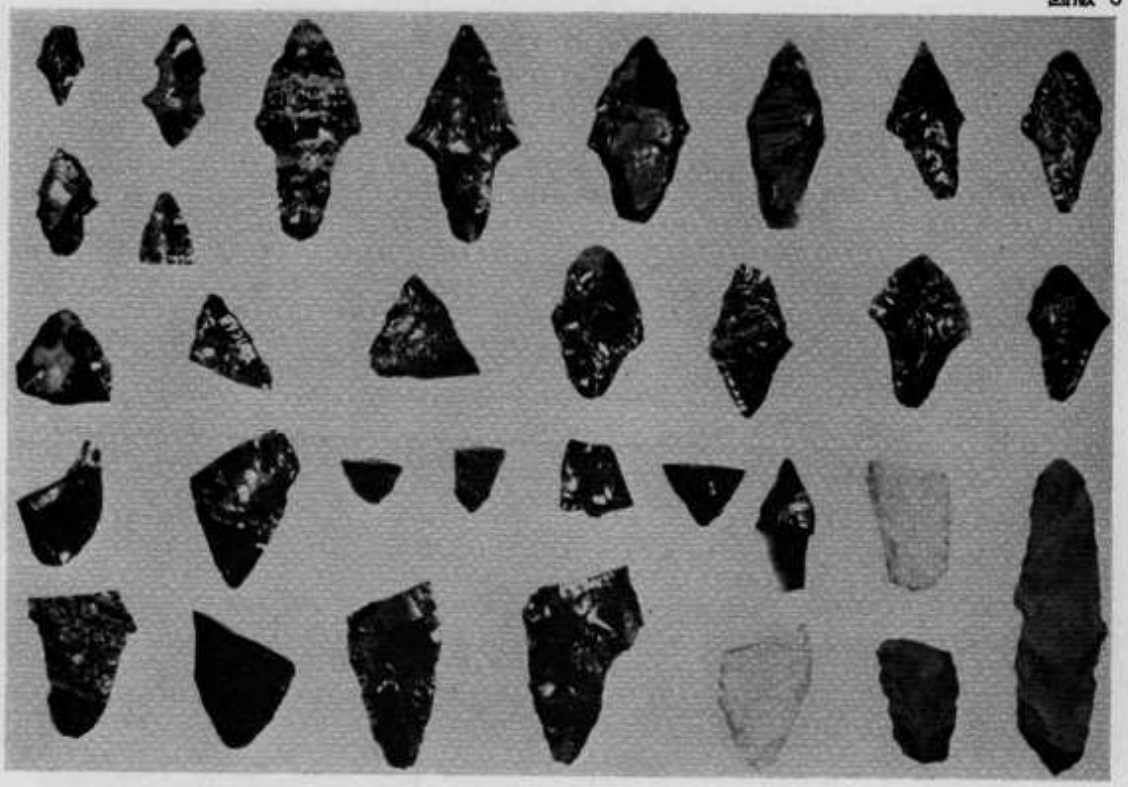
B 土 器 (3)



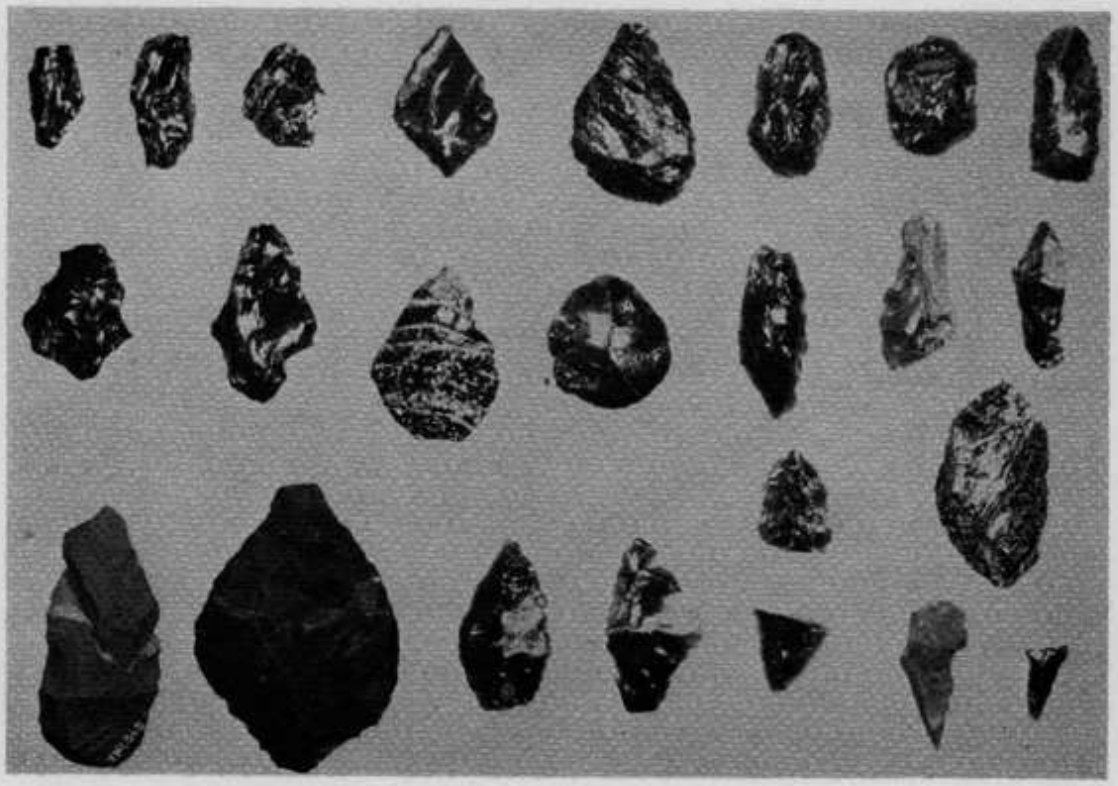
A 土 器 (4)



B 土 器 (5)

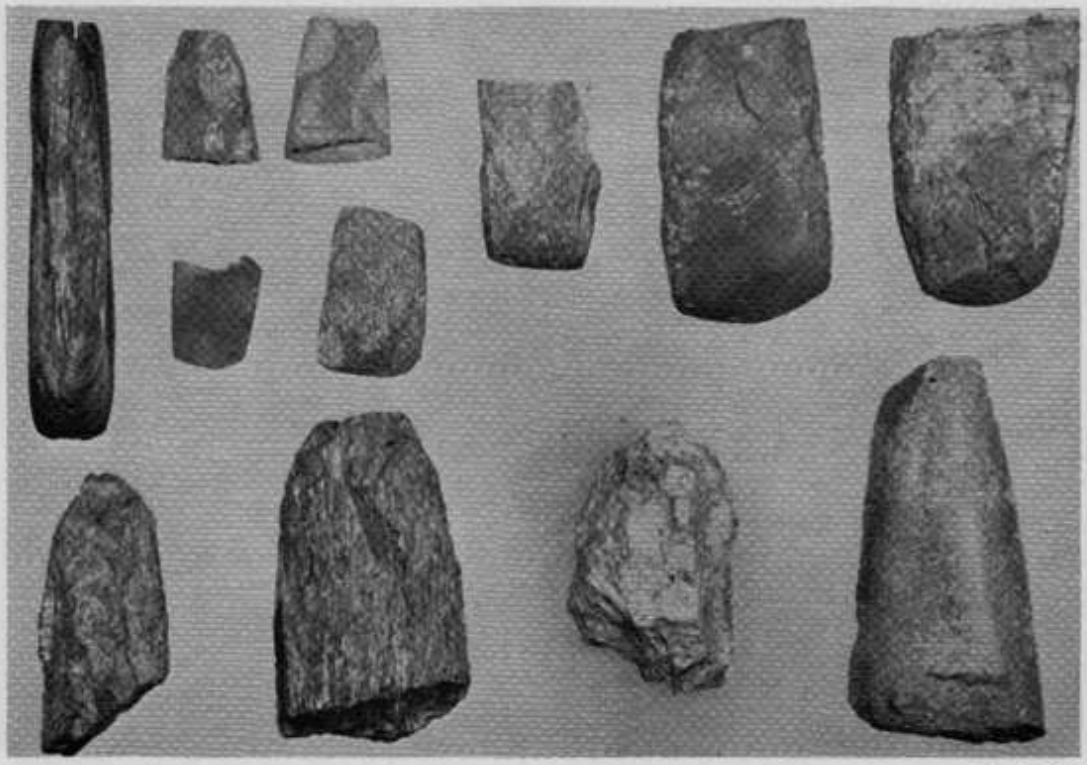


A 石器 (1)

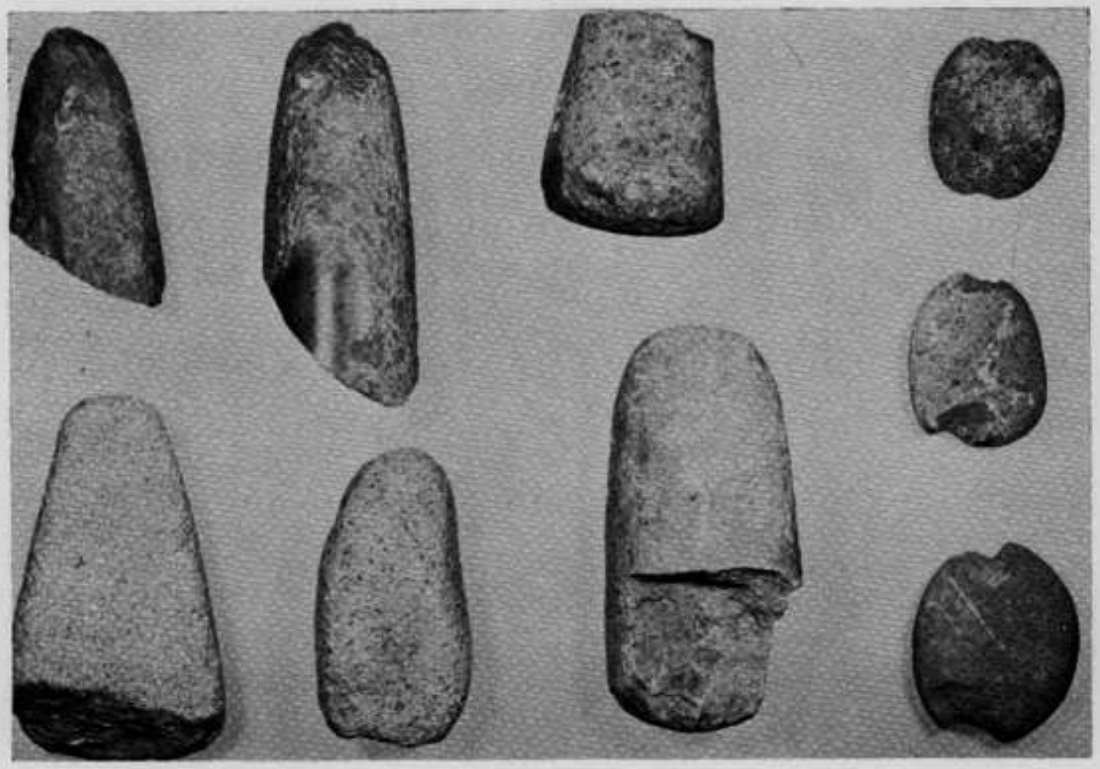


B 石 器 (2)

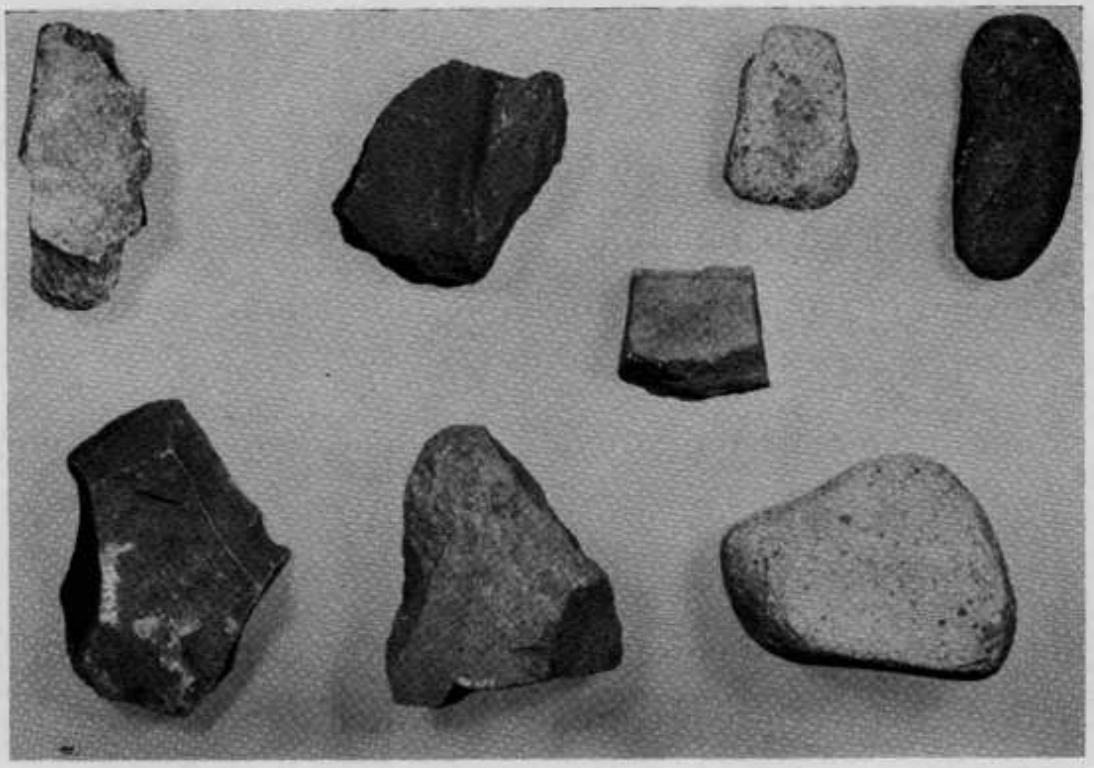
A 石 器 (3)



B 石 器 (4)



A 石 器 (5)



B 石 器 (6)

札幌市文化財調査報告書 Ⅲ

T 77 遺 跡

昭和49年6月1日 印 刷
昭和49年6月25日 発 行

発行者　札 幌 市 教 育 委 員 会
札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所　三 陽 印 刷 株 式 会 社
札幌市西区手稲東3北2丁目